
悠久のフォルトーナ

kazaisyu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悠久のフォルトウーナ

【Nコード】

N3702Y

【作者名】

k a z a i s y u

【あらすじ】

——気がつけば、俺は花畑の只中にいた。

目を覚ましたとき、カナメがいたのはVRMMO《オーリオウル・オンライン》の中だった。自らがプレイヤーだったはずの……見慣れているはずの世界。しかし、どこか違う？　これは……本当にゲームなのか？

ゲームオーバー＝死。脱出不可能な、完成された《世界》の中で、少年は何を残すのか……。

オーリオウル・オンライン 概要（前書き）

『世界観概説』は、《悠久のフォルトウーナ》の世界観、そしてゲームシステムを解説するためのページです。

基本的に補足内容ですので、読まなくても本編をお楽しみできます。

オーリオウル・オンライン 概要

◆オーリオウル・オンラインとは？

オーリオウル・オンラインは電腦フルダイブ環境を利用した、純国産の没入型VRMMORPGです。

この雄大な大陸《フォールトウーナ》に降り立つ皆さまは、非常に多くのものを眼にするでしょう。

風の吹き抜ける雄大な草原、遙か彼方に見える山々、そして蒼く澄み切った美しい空、どこまでも続く、ひたすらに広い海。

その情景の全ては、決して一定ではありません。

季節と共に移ろい、変わりゆき、しかし人々の――皆さまの心に、何かを残してゆくでしょう。

この世界にあるのは、優しいものばかりではありません。

強大なモンスターの潜むダンジョンや、極寒の雪原、灼熱の火山など、多種多様に富むフィールドがプレイヤーの皆さまを待ちうけています。

そしてあるいは、モンスターだけではなく、時に敵対したプレイヤーと戦いになることもあるかもしれません。

この世界は、優しいばかりではありません。

そう、この世界は――もう一つの『現実』。

貴方にとって、二つ目の『現実』となるのです。

ようこそ、オーリオウル・オンラインへ。

さあ、終わることのない旅を始めましょう。

◆オーリオウル創世神話

かつて古、世界には無限の海と、空に浮かぶ大陸とが存在していた。無限の海には一つ目の巨人、空に浮かぶ大陸には天空の賢者たちが住み、互いが互いを知らず、また触れぬがゆえの平和を保っていた。しかし天より神が降り立つと、巨人は神に手を伸ばすため空を見上げ、賢者は神に跪くがゆえに海を見下ろした。両者は互いを知り、そして知るがゆえに異なる二つは共存を許さず、果てのない闘争が始まった。

二百七十八日の間戦いは続き、賢者と巨人は互いに力尽きて、空に浮かぶ大地は崩れ去り、海では津波が全てを飲みこんでいく。その最中、巨人の放った一矢が神を射抜き、そして世界からは光すらもが消え去った。

巨人も賢者も、全て何もかもが尽き果てようとした世界の中で――しかしある女神が、ただ唯一救いを差し伸べた。

女神は、大いなる光環《オーリオウル》を生みだし、闇に果てようとした世界を救い、そして大いなる恵みをもたらした。

巨人の骸で、崩れ落ちた天空の大地を編み合わせ、大海の上に大いなる大地を築き、

賢者の骸は、蓄えたその無限の知恵を、たったひとつのか弱き小人へと与えたもうた。

オーリオウルによって編まれた七日の奇蹟は、世界を癒し、生命を救い、そしてこのフォルトゥーナの大地を生み出したのである。

そして、それから幾星霜の年月が過ぎ去り。

今もなお、天に輝くオーリオウルの円環によって見守られるこの世界、フォルトゥーナ。

しかし神への願いはいつしか薄れ、忘れ去られ……やがて、決してオーリオウルの光が当たらぬ無明の闇、その間隙より生み出されし

”魔物”が、この世を跋扈するようになり始めた……。

人々は知らず、それでも彼らは予感する。

もはや、世界を回す円環が、わずかずつ歪みはじめていることを――

どうか汝よ、オーリオウルの守護あらんことを。

オーリオウル・オンライン 概要（後書き）

システム概説を分離、創世神話を追加しました。

フォルトゥーナ大陸

> i 3 4 6 3 0 — 4 3 8 0 <

◆フォルトゥーナ大陸

フォルトゥーナ大陸は非常に膨大な面積を持つ大陸であり、このユースティティア大海において唯一残った大陸であると言われている。

かつて七つの大陸があったと言われていますが、現在では霧の中へ姿を消し、もはや見つけることは叶いません。

もつとも、それは遙か遙か昔、今より一千年は古の話。

いま、このフォルトゥーナ大陸は繁栄の只中にあり、人々にとって、外海のことなどはや一抹ほどの興味もないのです。

◆国家概説

#シシス王国

始まりの地。オーランドの西、大陸の中央付近に存在し、オーランド帝国、ガーベラ王国、ゼス共和国、ラルバニエ、ノースクラニド、マーモット王国、コンスタンティアなど数多くの国と国境を接している。

数多くの伝承と伝説、遺跡などが多く残る古き王国であり、その歴史は非常に古い。

かつて中原の覇者とも呼ばれたが、現在では中原諸国家のひとつではない。

しかしその王族は、かつてのライオニール王国の正当後継であるとも言われており、中原の諸国家にとっては信仰の源であり、かつ最も邪魔な存在ともいえる。

土地は極めて肥沃であり、人々の暮らしも豊か。魔王領域からも遠いため、モンスターのレベルは高くないが、その反面軍勢力自体も

衰退しつつあり、近年の戦乱の兆しに頭を痛めている。

賢王国家とも呼ばれるほど、代々の王は『アタリ』が多く、貴族についても腐敗しておらず、未だノブレス・オブリージュの精神を保っている。非常に高い外交能力を有していると言われ、周辺諸国とも武力ではなく交渉によって和平を続けてきた経緯を持つ。

しかし一方で、度重なる帝国からの軍事的緊張によって、内部では軋轢が生じつつあるとも言われている。

#オーランド帝国

大陸の東部に位置する巨大軍事国家。東部諸国を武力により蹂躪し制圧した英雄の国。

コペルギール王国、ラルバニエ、ゼス共和国、ガーベラ王国、シシス王国と国境を接している。

魔王領域から遠い東部国家の中では、群を抜いた軍事力を有している。

ここ十数年では内政に努めて国内を整理していたが、近年、ついに諸国侵略の準備を進めつつあると言われており、周辺諸国を緊張に巻きこんでいる。

#ゼス共和国

英雄ゼス・フレグニールによって独立したと言われる国家。

シシス王国、ガーベラ王国、オーランド帝国に挟まれるように存在する。有名な傭兵国家であり、その軍事力は高い。

オーランド帝国の軍備拡張によって、もっとも緊張の増している国家である。恐らく、もっとも最初に侵攻を受ける国家であろうと言われている。

#テテスIIギニアス連邦

大陸の南部、もっとも広大な土地面積と強大な国力を持つ南方の雄。アグニス公国、ガーベラ王国、シルヴァーナ半島、ヨハン侯爵領と

国境を接している。

オーランド帝国に抵抗できる唯一の国家であろうと言われているが、ヨハン侯爵領の不安定化や、西方の魔王領域からの不安によって、中原の動乱には今のところ手を出さないだろうと言われている。西方には魔王領域が存在し、海を越えての被害に悩まされており、その経緯からか非常に強大な騎士団を各都市が有している。

#アルマダ聖王領

大陸北西部、アルマダ半島全体を支配する宗教国家。コニール王国、ヴィンディールとは国境を接している。聖王領の名の意味する通り、オーリオウル信仰の総本山であり、各国にとっても干渉することの出来ない絶対領域でもある。

また、コンスタンティア以西は『聖王領域』と呼ばれ、決して何者にも介入できず、してはならないという『不可侵条約』が結ばれている。

その解釈の違いによって多数の派閥が数多く宗教戦争を引き起こしてきた経緯を持つが、現在、聖王領は他国に干渉せずされずの立場を保っている。

半島の東側には「中立島」が存在する。

#魔王領域

大陸の最南西に位置する『魔王国家』。フォルトウーナ大陸の南西側、『ルシウス大陸』に存在し、南マーモット、ライニール、サンクト・ルシア、カサンドラ、アドール、アモール王国に国境を接している。

非常に強力かつ多数の魔物が徘徊する危険な領域であり、正確には誰かが収めているわけではない。

しかし、その魔物による統率的な動きから、何者かの存在、即ち魔王の存在を推測されており、それゆえ魔王領域と呼ばれている。

魔物の多さ、強大さから誰も手を出すことのできない土地であり、

また近年、この領域からの侵攻が活発化しており周辺諸国を不安に陥れている。

テレスⅡギニアス連邦は魔王領域に対する干渉や調査に活発的であると言われている。

#倭國

わこく。大陸の東に位置する群島国家。

かつて、この大陸より遙か彼方、離れた海の上に存在していたが、大規模な地殻変動によって大陸のすぐ傍にまで移動した。その時に、地続きだったはずの大地は分断され、現在では七つの島によって構成されている。

その地殻変動によって、住民の三割が死亡したと言われ、未だ復興作業が続いている。

長い間他国との接触を持たなかったため、非常に独自の文化を発展させており、それらの特異な技術の一部は大陸へと流れている。

#コペルギール王国

オーランド帝国の北方、大陸の北東の位置に存在する王国。ラルバニエ、オーランド帝国と国境を接している。

土地柄冷たい風が吹きこむ地方であり、北半分は作物も育たないような雪原が広がっている。特にその北端では「永年凍土」と呼ばれる決して溶けることのない氷の大地が広がっていると言われている。その土地柄、オーランド帝国にとっても旨みがあるとは言えず、帝国とは平和条約を結んでいる。

#ラルバニエ

オーランド帝国の北西に位置する共和制国家。コペルギール王国、オーランド帝国、ノースクラニド、シリス王国と国境を接している。民主主義を標榜する国家で、ゼス王国と同じく帝国による侵略の危険性を有している。

その土地は極めて肥沃で、数多くの資源を有している。

#ノースクラニド

ラルバニエの西、霊峰クラニドの北方、クラニド半島を主権領域として保有する国家。シシス王国、ラルバニエと国境を接している。セクレト島の国家と、海を挟んで幾度とない衝突を繰り返しており、軍事力はゼスと並んでかなり高い。ラルバニエが落とされれば次は自国の可能性が高く、ラルバニエと共に、中原の軍事同盟政策を推し進めている。

#ガーベラ王国

シシス王国の南部に位置する中原国家の一。シシス王国、オーランド帝国、ゼス共和国、アグニス公国、テテスⅡギニアス連邦と国境を接している。

非常に広い国土を持つ中原一の軍事国家であり、アグニス公国やマーモット王国とは幾度となく衝突を繰り返してきた。

中原の軍事同盟にとっての柱であるが、アグニス公国やマーモット王国との関係悪化を考えてあまり乗り気ではない（軍事同盟はあくまで帝国に対するものであるため、これらに助力は求められないだろうという考え）。

#アグニス公国

テテスⅡギニアス連邦の北方に位置する国家。中原としては最南部に位置する。ガーベラ王国、マーモット王国、テテスⅡギニアス連邦と国境を接している。

ガーベラ王国とは歴史的に戦争を続けてきた経緯を持ち、対ガーベラ王国においてマーモット王国とは協力的で、条約こそ締結していないが軍事的に連携している。

テテスⅡギニアスともっとも国境を接しており、近年ではその脅威から軍備拡張を推し進めている。

#マーモット王国

ガーベラ王国の西側、シシス王国から南西に位置する王政国家。シシス王国、ガーベラ王国、アグニス公国、コンスタンティア、南マーモットと国境を接している。

南マーモットは60年前に王国から独立しており、以後、魔王領域の活発化と共に静寂を保っている。

シシス王国とは比較的友好関係を保つが、ガーベラ王国との関係は悪化の一途。

コンスタンティアと共に聖王領域への不可侵条約に加盟している。

#コンスタンティア

シシス王国の西側に位置する国家。聖王の統治する『聖王領域』への玄関口で、『聖王の守護者』を自称している。

その名の通り高い軍事力を誇り、その一方で、他国の戦闘や政争には一切介入しない。

#カタル、ヴィンディール、コニール王国

聖王領域に連なる三国で、それぞれが不可侵条約に加盟している。

#エイドス島

聖王領域の西側、アルマダ海に位置する島で、聖王領域ともゴルドバ海峡を挟んで接している。

この島には『亜人種』と呼ばれる人とは異なる種族が暮らしていると言われ、人の歴史には介入せず、長年その沈黙を保ち続けている。

#セクレト、アンリ独立国

大陸の北、ステニア北海に位置する島国国家。周囲を海に囲まれることもあって基本的に寒冷な土地で、肥沃とは言い難い。

百年以上も前から、民族的な対立によって独立と併合、そして内戦

と紛争を繰り返しており、このセクレト島は別名『血みどろ島』とすら揶揄されている。

#ヨハン侯爵領

ヨハンⅡブルゾフ侯爵がテレスⅡギニアス連邦より反乱を起こし独立した特別領。

反乱自体は失敗し、ヨハン侯爵は討たれたが、互いの不可侵条約とテレスⅡギニアス連邦の戦争時に兵を出すという条件付きで独立した。

しかしその一方で、オランダ帝国からの海軍戦力のほとんどを押し付けられており、近年ではまた反テレスⅡギニアスの風潮が高まっていると言われ、連邦の頭を悩ませている。

#シルヴァーナ半島

別名「死の半島」である。魔王領域にほど近く、あまりにも強力すぎるモンスターが跋扈しているため、結果的に空白地帯となってしまう地域。

その一方で、海賊たちの根城になっているとも言われている。

#南マーモット

マーモット王国から独立した国家であり、正確には南マーモット公国と言う。ルシウス大陸とフォルトゥーナ大陸を繋ぐ位置に存在し、二つの大陸を繋ぐ三つの大橋を所有している。

独立運動が本格化し始めたところに、魔王領域からの侵攻が活発化し、結果として捨て置かれることになってしまったという経緯を持つ。

基本的には『国』として認められておらず、公的にはマーモット王国の所領である。現在では、テレスⅡギニアス連邦による支援を受けていると言われている。

#アモール

『ルシウス大陸』の北側、魔王領域にほど近い位置に存在する。かつてアルマダ聖王領によって『対魔王』のために設置された特区であった。しかし魔王領域の激しい侵攻により、現在ではその領土の半分以上を奪われている。コンスタンティア経由での支援を受けており、アモール軍はモンスタールによって家族や友人、恋人を殺された者たちで構成されており、総じて士気は高い。

#アドール、カサンドラ、サンクト・ルシア、ライニール
かつて魔王領域が存在する以前、ルシウス大陸にて存在していた諸国家群であり、現在ではほとんど領地を持たず、民族を国の証として存在するのみとなっている。

その連合軍を保有しているが、同時に国民のほぼ全員が戦闘に長けており、また極めて貧困率が高く自給自足が基本である。事実、国としての機能はほとんど果たしていない。

フォルトウーナ大陸（後書き）

なんか色々まとめまくった気がしてすみません……。

一体本作ではどれぐらいの国が登場するのでしょうか？（いや、決めてないんだけど……）

ちなみ、基本的にシシス王国が舞台だと思って下さい。

交易都市カリスは大体、シシス王国の左下ぐらい。

いつかシシス王国の地図も用意出来たらいいなあ。

ちなみに大きさは絵で見ると狭いかもかもしれませんが、実際のものすごい広さです。第三話時点では、シシス王国とノースクラニドぐらいしか実装されてませんでした、とでも言えばその広さは分かるでしょうか。

その時点でも数十万人のプレイヤーを満足させるだけの広さを誇っていたので……まあ、かなりのものかと思います。

システム概説

◆システム概説

#ステータス（隠し数値）

・筋力値 / Strength :

攻撃力に影響し、どれほど重いものを、どれほど早く振れるのかに影響する。

・頑強値 / Vitality :

防御力及び、スタミナ量、最大HPについて大きく影響する。

・速力値 / Agility :

スピード、及び反応速度、またジャンプ力について大きく影響する。

・精神値 / Imagination :

魔法攻撃を行ったとき、その効果力、ダメージ、MP最大値に対して影響する。

#パラメーター

・攻撃力 / Attack Power

筋力値、装備補正、クラスによって決定される。

高ければ高いほど、全部位へ与えるダメージが上昇する。

・防御力 / Defence Power

頑強値、装備補正、及びクラスによって決定される。

高ければ高いほど、物理攻撃に対する耐性が上がり、ダメージを受けにくくなる。

・魔力 / Magic Power

精神値、装備補正、クラスによって決定される。

高ければ高いほど、魔法によるダメージや効果、継続時間が上昇する。

・魔法耐性 / Untier Magic Defence

頑強値、精神値、装備補正、クラスによって決定される。

高ければ高いほど、魔法によるダメージを減少し、弱体化系魔法の被継続時間が減少する。

・速力 / Speed-Power

速力値、装備補正、クラスによって決定される。

高ければ高いほどダッシュ力が上昇し、速く走れるようになる。

・クリティカル / Critical-Power

レベル、及びクラスによって決定される。

クリティカルヒット（生身への直撃）を行った時の威力が上昇する。

#クラスについて

クラスは、一人につきメインクラスひとつ、サブクラスひとつを設定できる、いわば「職業」のことです。

クラスにはそれぞれスキルや、ステータス補正が設定されており、またクラス熟練度の蓄積によって、クラスのレベルを上昇させることが出来ます。クラス熟練度は、クラスに設定されたスキルを使用する、もしくは敵を倒すことによって熟練値を獲得できます。

レベルが上がるごとに「スキルポイント」が付与され、そのスキルポイントを割り振ることで、新たなスキルを覚える、ないしそのスキルをレベルアップさせることが出来ます。

また特定の条件を満たすことで、新たなスキルを習得することが可能です。（例…ファイターのスキル『ストライド Lv1』を習得するには、スキル『片手武器習熟 Lv1』が必要）

クラスには、『ノーマルクラス』、『メジャークラス』、『製造クラス』、『コミュニティクラス』、そして『レアクラス』の五つに分かれています。

またクラスは、一度転職したことのあるものであれば、町中でいつでも再度転職することができます。レベルや経験値、習得スキルも常に引き継がれるので、是非転職条件を満たしたら、いろんなクラスに転職してみましょう。

・『ノーマルクラス』

「平民」や「冒険者」がここに属しています。他にも「浮浪者」「農民」「漁師」などといったクラスが属していますが、基本的に彼らは戦闘力を持ちません。そのうちもっとも高い戦闘能力を持つのが『冒険者』であり、プレイヤーは皆、このクラスを取得することから始めることになります。

・『メジャークラス』

ここに存在するのは、即ちファイター、シールド、メイジ、シーフの四種類です。これらのクラスの最大の特徴は、特定の条件を満たせば、二次クラス、三次クラスへと進化できる点にあります。

たとえばファイターの場合は、『グラディエーター』 or 『シールド』という二次クラスへ。そして『グラディエーター』はさらに『デストロイヤー』 or 『剣聖』といったクラスに転職することが可能です。その名の通り、恐らくプレイヤーの皆さんがもっとも所有するであろうクラスであり、一般的に、戦闘はこのクラスで行われることとなります。

・『製造クラス』

その名の通り、製造を専門にしたクラスが多数存在しています。代表的なところでは『鍛冶師』、『錬金術師』、『細工師』、『料理人』といったところでしょうか。

彼らは強い戦闘力こそ持ちませんが、武器を作ったり、アイテムを製造したり、時に料理を作って皆の舌を楽しませることが出来ます。いわゆる職人——それこそが、この製造クラスの醍醐味です。

・『コミュニケーションクラス』

コミュニケーションクラスというのは、『商人』を始めとしたコミュニケーション能力、及びそれに依存したスキルを持つクラスのことです。

数こそ少ないですが、縁の下の力持ち。それこそが彼らコミュニケーションクラスなのです。

・『レアクラス』

レアクラスは、特殊な条件を満たさなければ転職できない、特別なクラスのことです。

転職条件が非常に面倒なものから、そうでもないものまで多くあり、未だ見つかっていないレアクラスも多いことでしょう。

しかし必ずしも、彼らは絶対的な戦闘力を持っているわけではありません。

彼らに出来るのは、すなわち「他のクラスにはない戦闘方法」なのです。

#サブクラスに関しての注意点

サブクラスとは、メインクラスとは異なる「補助的なクラス」です。今まで転職したことがあるクラスを、サブクラスに指定することが出来ますが、しかしメインクラスとは異なり、クラスによるステータス補正は行われません。

しかしサブクラスに指定したクラスでは、習得したスキルを自由に使用することが出来るので、たとえば『魔法使い＋剣士』なんてこともできちゃうかも？

しかし、ひとつだけ注意点があります。

それが『相反するクラスはサブクラスにできない』ということです。相反するクラスとは、二種類存在し、ひとつは『上位クラスに対する下位クラス』です。メジャークラスにおいて、同じ系列の三次クラスが二次クラスをサブクラスにすることはできません。また逆に、二次クラスが三次クラスをサブクラスにすることはできません。（例…グラディエーター⇄デストロイヤー）

しかし根本的に、上位クラスは下位クラスで覚えたスキルを全て使

用できるため、下位クラスをサブクラスに指定する必要性はありません。

次に、『クラスによってサブクラスに指定できないクラスがある』場合です。

たとえばファイター系列のクラスは、メイジクラスと相関関係にあるので、ファイター系列に属している以上、メイジ系列のクラスをサブクラスにすることはできません。そう、いわゆるさっきのような『魔剣士』は作成不可能なのです。

しかし、ここにひとつの救済措置が存在します。

それは、『たとえ相関関係にあるクラスでも、下位のクラスは指定できる』というルールです。

即ち、ファイターの三次クラスにある『デストロイヤー』は、メイジの二次クラスにある『ウィザード』に対しては、サブクラスに指定できるのです。

#アビリティについて

アビリティとは、『クラスに関係なく発動可能なスキル』のことです。

特定の行動を起こすことで習得可能で、これらのスキルは、たとえばクラスを変更してもそのスキルは効果を発揮し続け、ないし使用することが可能です。

このアビリティに属するのが『採掘』や『夜目』、他にもレアクラスへの転職に必要な特殊なアビリティなども存在します。

習得方法は、『特定のモンスターを指定回数以上倒す』ことや、『とあるイベントをクリアする』ことなどです。

いろんなアビリティがありますので、是非探してみましよう。

システム概説（後書き）

システム概説を『オーリオウル・オンライン概説』より分離しました。

(01) ー 幸せな日々

ズウン、という音ともに、巨人の頭が地面に落下した。

天をも衝くようだった威容だった、その鋼鉄の巨人は、今や地面に片膝をつき……そして、登頂から順番に、頭から肩へ、剥がれ落ちるように崩れていく。

そして、数秒後。その全てが瓦解するように、大地へと崩れ落ち、天高く砂埃が舞い上がるのと、まったく同時。

俺達の頭上で、高らかにファンファーレが鳴り響いて――。

「やつ……」

巨人の足元に居た俺は、砂埃を被りながら……しかし高らかに武器を掲げて、気がつけば、俺は叫んでいた。

「やつ……た、ぞーッ……!!」

うおおおおおおっ!! という歓声と同時に。

ぶわあっ、という風の音と共に、巨人であったものから立ち上る、無数の青い光の粒が、天へと昇っていった。

二年間の永きにも及んで誰も攻略しえなかった、難攻不落のSランクユニークモンスター『ギガース』は……ついに、この日、俺達の手によって討伐されたのである。

――空に浮かぶ、白く、そして薄く濁る円環が、俺達の勝利を見下ろしている。

オーリオウル……円環に見降ろされた世界、フォルトウーナ。その片隅で、俺たちは今日、記念すべき一日を刻んだ。

――これは、俺にとって、何よりも輝かしい記憶。

決して失いたくないと願う、あの冬の日の記憶……。



「やったなあ、カナメ!!」

がつんつ、と肩を組まれると同時にジョッキをぶつけられ、俺はわずかによろめいた。

見ればそれは、この店——『風見鶏亭』の店主である。NPCに任せておけばいいものを、自分で創業したこの店を、わざわざ自分で切り盛りする偏屈者だ。

そこまで強くぶつかられたわけでもないのによろめいて、「こりゃ酔ってるな……」と少し自覚。とはいえぶつけた方の顔も真っ赤であり、似たようなレベルであるから問題ない。

無論、この世界……即ち、没入型MMORPG^{VR}において、酒を飲んだところで本当に酔っぱらうわけではなく、その酩酊感は、あくまでシステムの作り上げた幻覚でしかない。のだが、まあそんなことは実に些細な問題である。

ぶつけあったお互いのジョッキには、なみなみとエールが注がれており、当然ながら衝撃で少しテーブルへと零れてしまっている。が、気にする人間もない。

気がつけば周囲も割と惨状である。酒に弱いらしい面々は早々に酔い潰れて眠ってしまっているし、人によってはなぜか性格すら変わり、説教すら始めている者もいる。

（リンの奴……ストレス溜まってんのか？ ライも可哀想に……）
説教する側を心配し、される側を憐れみはするが、まあ助けるつもりは毛頭ない。せつかくのこういう席だ、思い思いに吞めばそれでいい。

今日は、このVRMMO……《オーリオウル・オンライン》にて、初めてSランクのユニークモンスターが討伐された日である。

ユニークモンスターというのは、いわゆるボスのようなものであり、時にダンジョンの奥深く、時にフィールドに出現する強敵だ。

モンスターランクは雑魚であれ何であれE〜Sに分けられ、Sと

いうのは最高ランク、そのユニークともなれば、このゲーム最強の一角と言っても相違ない。

ネットゲームが往々にしてそうであるように、このゲームにはエンディングと呼べるものは存在しない。あるのはただ、茫漠とした広大な世界である。ストーリーは、一人一人、プレイヤー自身が創り上げていく。それは要するに人生と同じものだ。

しかしこの《オリオウル・オンライン》の茫漠さたるや、まさに筆舌に尽くしがたい。

そも、最強と呼ばれるSランクのユニークモンスターが討伐されるのに、およそ二年という長い年月を有したのだ。

まあどれだけ強かろうが、何百人単位でプレイヤーが押しかければ倒せるのだろうが……そこは生憎、ユニークモンスターは、戦闘人数が十人を越えるとどこぞへ消えてしまうのだ。

まあともあれ、今日この店は、Sランクユニークモンスターを倒した、十人から成るパーティ、つまりギルド《銀楯^{S.E}の聖槍^L》による貸切だった。

とはいえ、俺はギルドの一員ではないのだが……まあ、それこそ些細な問題という奴だろう。

「しかしよお……ぐっ……。感慨深いぜ……」

「あ？」

肩を組んだままの店主が、ぐっと袖で目元をぬぐう。

「だってよお、俺はお前らがヒラのピラピラギルドの時から面倒見てやってるからよお……」

「どこの設定だそりゃ……」

半眼で告げ、溜め息を吐く。

この店主とは、非常に長い付き合いだ。正確には、俺がこの店に通い出して、気がつけばギルドの面々も行きつけになった、というところだろうか。

実際この店は、この街、交易都市カリスで指折りの店だと思う。大通りから離れているという立地条件の悪ささえ除けば、雰囲気はいいし、飯もうまい。とはいえそれを褒めると、この男は調子に乗るので黙っておくが。

しかし、交易都市カリスをホームとするギルド、《銀楯の聖槍》^{S.E.L}がここに通い出したのは、むしろ彼らがトップギルドに数えられるようになってからだ。

「まったく、無茶苦茶言ってる……」

「……でも、感慨深いのは同感」

俺の溜め息混じりの言葉に、かぶさるように聞こえた声は、ひどく聞きなじみのするものだった。

「シノブ姉？」

振り返れば、そこにはアイスブルーの髪をした少女が、じつとこちらを見ていた。

その表情は無表情である。しかし、長年を共に過ごした経験から、それだけではないこともよく知っていた。もっとも現実世界ならばともかく、それがアバターである以上、簡単に読みとることなど出来はしないが……。

「……私は、カナメのおかげだと思ってる」

はっきりと告げられた言葉に……しかし、俺は小さく笑った。

「そんなことないよ、シノブ姉。だって、俺をここに……この《オリオウル》に誘ってくれたのは、シノブ姉の方じゃないか」

シノブ。そのアバター名は、しかし彼女の本名でもある。

蓮宮忍。彼女は自分にとって、隣に住む古くからの幼馴染であり、そして自分……何の取り柄もない平凡な男、千条要を、この世界に連れてきた張本人でもあるのだ。

それゆえに、シノブ姉。

その呼び名は、現実でもこちらでも変わらない。そして俺のアバ

ター名『カナメ』も、本名と同じだから、この二人の間だけは呼び方がそのままだ。

まあ、俺のアバター名まで本名と一緒にするのは、シノブ姉に半ば無理矢理そうされたんだけど……。なんでも「要の名前、好きだから」とかそんな理由で……。

少し微笑んで、俺は言葉を続けた。

「それにさ。俺なんて、所詮は前でガンガン当たって碎けるしかないだけのアタッカーで……。それこそ、シノブ姉のヘイト管理がなかったら、すぐに死んじまうくらいひ弱でさ」

「……そんなことない。カナメのアタッカーとしての攻撃力は、私は凄だと思う」

「それは、私も同感だな」

ふと、唐突に割りこんできたのは、例の、説教を繰り返していた黒髪の女性だった。

ポニーテールを揺らし、二人の間に割り込んでくる。シノブ姉が少しむっとした表情をしたが、酔っているせいなのかろくろく気づいた様子もない。

装甲こそつけてはいないが、戦闘は終わったというのに、なぜか変わらず白と青を基調にした騎士服である。思うに、彼女がこれを出いだところを自分は見たことがない気がする。まあ動きやすいらしいので、彼女としてはそれで構わないのだろう。

そんな彼女は、うんうん、となぜかしきりに頷きながら、言葉を吐づけた。

「隣で戦っていても思うが、カナメのあの精神力は凄いよ。どんなに強烈な攻撃でも、ギリギリで避けて反撃するんだ。普通なら、もっと怖がって距離を取るはずなのにさ」

「いや、正直、リンが背中を守ってくれるおかげだと思ってるんだけど、俺は」

そう言って苦笑する。リン、と呼ばれた、黒髪をポニーテールにまとめた少女は、「そうか」と言って顔をやや赤く染めた。

「それに、銀楯^{S.E.L}の聖槍の一員じゃないはずの俺が、このパーティに参加させてもらえたのも、懐の広いマスターさんのおかげだしな」
彼女――リン、ことリーンディアは、ギルド《銀楯^{S.E.L}の聖槍》のギルドマスターを務めている。……というよりもむしろ、リンのカリスマ性にあやかって結成された、とも言っている。

リンというプレイヤーは、容姿、実力、性格ともに、《オーリオウル・オンライン》数十万人のトップに位置している。

Sランクユニークモンスターの討伐パーティにとって、彼女ほどおあつらえ向きな人間もないだろう。事実、作戦や準備から何まで、彼女はパーティリーダーとして、その手腕を遺憾なく発揮していた。

対する俺は、コミュニケーション自体は苦手ではないのだが、ギルドが苦手なこともあり、ずっとソロ――まあシノブ姉がいるからペアか――プレイを貫いていた。いわゆる一匹オオカミ気取りか。
そんな俺に、「一緒にパーティを組まないか」と初めて声をかけてくれたのが彼女だった。

シノブ姉の意向もあって、再三のギルドへの加入要請を断り続けている俺を、しかしそれでも気分を害することなく、ずっと誘い続けてきてくれた。

「その点、俺は感謝してるんだ」

彼女のような存在がいなければ、当然、今日のような感動的な場面に遭遇することなどありえなかっただろうから。

リンは、カナメの言葉に、「そうか」と少し嬉しそうに微笑んだ。
その頬は、やや朱に染まったままだ。

「あれれ、リーダー、もしかして照れちゃってるぅ?」

横から、聞き覚えのある声で囁きたててきたのは、ピンク色の髪をウェーブさせた、ロングヘアの少女だ。にやにや、という効果音が聞こえてきそうな、そんな笑みを浮かべている。

ぎぎぎぎ、という効果音を立てて、リンがひきつったような笑顔で振り向いた。

「ユリッ？ 何か言ったあ？」

「あ、ごめんなさいリン、ちょっと、待って、私何も言ってなー」
「問答無用——っ！！」

ずどがががっどんがらがっしゃーん——！

と、まあ効果音にすればこんな感じだろう。鬼と悪魔が追いかけてここを始め、周囲からは「やれやれー」とはやし立てる声が聞こえてくる。

それに小さくため息を吐いて、再び視線を戻す……と、今度は姉が膨れていた。

「シノブ姉え？」

「……私は、弟が人気者で心配」

はい？ とわけが分からずに問い返す。しかし、それに答えたのは、横合いからの笑い声だった。

「ははは……確かに。カナメさんはモテモテですね。同性としては羨ましい限りです」

爽やかな声に振り向けば、そこには、金髪碧眼の細面の少年が、いつの間にやら腰かけていた。

「ライ。お前、さっきまであっちにいなかったっけ？」

というかむしろ、あっちで説教されていた気がする。

「ええ、何やら不穏な予感がしたので、こっちに避難してきたんです」

カナメの疑問にあっさりと断言され、「あ、そう」と肩を竦めつ

つ返す。

この細面の少年、ライ、ことライリツヒは《銀楯^{S.E}の聖槍^L》のサブリーダーである。そして、自分にとっては数少ない、親友と呼べる少年だ。

ちなみに、コイツが敬語なのはデフォルトだ。目上とか目下とか、そういう類のものではない。誰に対しても丁寧な物腰で接する、まあそういうスタンスなわけだ。

「しかしお前も大変だよな」

「何がです？」

エールを口に運びつつ、ライが首を傾げる。それに、くい、と親指で背後——魔力障壁を挟んで睨みあいが続ける鬼と悪魔——を指差した。

「あの連中のセーブ役とか。俺には無理すぎる」

「はは、そりゃ僕にも無理です」

要約すれば「早く止めてこいよあれ」という意味だったのだが、即答で返されて、再び「あ、そう」と返すほかになく——ぐびり、ともう一度エールを喉に注ぎこんだ。

「そういえば、さっきの話なんですけど」

「さっき？」

「カナメさんは凄い、っていう話です」

にこり、とライはその細面で微笑むと。

「——正直、僕も……あの《ギガス》を倒せたのは、僕はカナメさんのおかげだと思ってます」

至って真面目に、そして優しい声で。はっきりとそう断言されて……しかし、これに「あ、そう」などと返すわけにもいかない。

ぱりぱりと頬を掻いて、エールを煽りながら言葉を返す。

「何言ってるんだ。お前のヒールがなきゃ、俺は早々に死んでたよ」

ライは《銀楯の聖槍》のサブリーダーであると同時に、優秀なヒーラーでもある。

雑魚戦ならばともかく、正直、ああいう大規模なユニーク戦では、あまりこいつ以外にヒール役を任せたくはない。

それほどまでに優秀かつ冷静、そして常に大局を見れる大物なのだ。

少なくとも俺はそう思っているし、同じ意見の人間はそれこそゴマンといえるはずであり……。

「カナメさんは、自分を過小評価しすぎなんですよ」

優しくも、しかし少しだけ嗜めるような色を混ぜて、ライは微笑んだ。

「あれだけ敵に張り付いて、あれだけの効率で攻撃を叩きこめるダメージディーラーを、僕は他に知りません。リーダーも僕も、ギルドのみんなだってそう思ってますよ」

……確かにそりゃ、アタッカーとしての自信はそれなりにあるけれども。

だが、それは過大評価って奴じゃないのか、などと思いつつ……しかし、口から衝いて出たのは、まったく違う種類の言葉だった。

「この十人のパーティ……誰が欠けたって、勝てなかったさ」

ああ臭い……と、言ってから少しの後悔。

だけれども、悪い気はしなかった。きつと、それは掛け値なしの、酒が入っていたからの本音だったから。

ライは、少し驚いたような顔をして……そして、ふっと微笑んだ。「……そうですね」

カンッ、とお互いのジョッキを合わせる。

今日の日を祝って。

そして、これからの幸あれと。

……かくして、《オーリオウル・オンライン》の、フォルトウ・ナ大陸の片隅で。

賑やかで、しかし幸せな、宴会の夜は更けていった。

(01) ー 幸せな日々 (後書き)

11／9 容姿設定が間違っていたり、書いていなかったりしたので追加しました。

(02) 一 座談会

昨日の記憶が、正直言ってあんまりない。

呑んで騒いで歌って、最後には全員が酔い潰れたことまでは覚えていたが、そこから先はまったく記憶にない。

ましてや目が醒めれば、なぜかS・E・Lこと《シルヴァリー・エスク・ロ
ンギス銀楯の聖槍》のギルドホームのリビングで寝転がっていたとか……もはや意味不明すぎる。

寝るならなぜ、自分の泊まっている宿屋じゃないのか。みんなはどうしたんだろう。つーか根本的に俺どうすりゃいいんだ、などという考えがぐるぐると渦を巻き、ソファアに座ってうんうんと唸る。

貿易都市カリスの片隅に存在するこのギルドホームは、非常に広大な面積を有している。

曰くなんでも、ギルドホームというやつは、ギルドランクに応じて増築されるらしい。であるなら、一体S・E・Lはどれほどのレベルなんだろう……。そう思わせるほどのデカさ、そして豪華さだ。白亜の宮殿を思い起こさせるような、そんな美しさ。しかしその一方で、いやらしさを感じさせないような、どこかシックな雰囲気。
(落ち付くな……)

そう思いながら、ソファアに体重をかけると、ぎしりと軋んだ音を立てた。

「つーか今何時だ……」

この《オーリオウル・オンライン》は、たとえ内部で熟睡しても自動的にログアウトはしない。

しかし、自動的なログアウト、というものが存在しないわけではない。

ひとつは、外界……すなわち現実世界の肉体が、何らかの刺激を受けた時だ。肩を叩かれたり、頬をつねられたり、あるいは音を聞いただけでログアウトしてしまう。まあこのあたりの設定は自分で弄られるわけだが。

もうひとつは、二十四時間が経過すること、だ。

機械の構造上、二十四時間以上の連続使用は出来ない仕様となっており、たとえどのようなプログラムであっても、二十四時間以上プレイヤーを拘束することはできない。

これはハードウェアの問題であるので、VR機器を改造しない限り、二十四時間以上のログインは事実上不可能であるのだ。

まあもつとも、たとえ一分でもログアウトすれば、再度ログインできるのだが。

右手の指を揃えて、内側に引く。ユーザーインターフェースを出現させるコマンドだ。すると、わずかな音を立てて、水色のインターフェースが視界右側に出現した。

ステータスやアイテム、クラスやスキルといった項目が並ぶ、最

下部。時間は――

(げ、朝の十一時……)

寝すぎだろ、俺。

基本的にゲーム内時間は日本時間と同期しているので、こちら側も昼ということになる。

もしかして俺は、朝から昼までずっと、このリビングを占領し続けていたわけなのか……。

申し訳なさと、同時に「じゃあギルドに入ろう」とか迫られそうな予感がして、若干ブルーになっていたのだが……。

そのとき、ギィ、という扉の開く音が聞こえて、はっと顔をあげた。その扉の向こうからひょこりと顔を出したのは……アイスブルーのショートヘア。

「……なんだ、シノブ姉えか」

「……なんだとはなんだ」

顔を出した当人は、ぷくり、と少しだけ頬を膨らませてから、ぱたぱたとこちらに駆け寄って来る。

「……どう？　ちゃんと起きてる？　頭痛くない？」

「ああ、大丈夫」

というよりも痛いわけがない。ゲームの作りだした仮想の酒に、二日酔いなどというものが存在するはずもないのだ。

「そういえば、他の連中は？」

「リンとユーリさんは落ちてシャワー浴びるって。ライ君は買い出し。ミミは下で武具の補修。他の人たちはもう落ちた」

「……なる」

他の人たち、というのは、前者と自分たち五人以外の、昨日のパーティメンバーのことだろう。S・E・Lのメンバーであり、自分にとっても得難い友人だ。が、実のところシノブ姉はその名前すらも覚えていないのだろう。

この人に、団体行動は無理なのだ。天性の引きこもりにしてニート。人の名前を覚えるのは大の苦手。コミュニケーション能力は自分よりもさらに皆無だ。むしろ、リンやライたちの名前を覚えているだけでも奇蹟に違いない。

まあもつとも、それで不快というわけではない。この人は、自分が認めた人には誰よりも優しく接するのを知っているから。

シノブ姉の言葉に頷いて、「よっ」とソファから立ち上がる。
「どうする？」

「俺ももう24だし、ミミさんに武器預けて、一風呂浴びてくる」
そう、とシノブ姉が頷き、そして同時にぴたりと傍によってくる。そして必殺の上目遣い。毎回思うのだが、この人分かってやっているんじゃないのか。

そんなことをつらつらと考えるカナメに届いてきたのは、一言。

「……ごはん」

「作りに来いと？」

「イエス」

ですよねー、と頷いて、分かったとばかりに肩をすくめる。「待ってる」と言うシノブ姉を置き去りに、リビングから出て、そして地下への階段に。

地下への螺旋階段を降り始めると、カン、カン、という音が木霊するように耳へと届いてきた。

地下は、S・E・Lに所属する、専属の鍛冶師のために用意された空間なのだ。とはいってもそう広いわけではないが、鍛冶のための設備は一通り整っている。

螺旋階段を降り、石造りの門を潜る。

むわっとした熱気に、思わず息を吐いて体温を調節。もっとも、その奥で金槌を振り下ろし続ける人物に、声をかけることはしない。作業中に声をかけるのは、明確なマナー違反だからだ。

一言で言えば、小柄な人物であった。

正直言って、片手に持つハンマーが非常に不釣り合いそのものだ。くりくりした瞳、流れる金髪、華奢な腕、どこからどう見てもただの少女。それが、この熱気の中で汗を垂らしながら、一心不乱に金槌を叩き下ろし続けているのだ。

鍛冶、というのは、生産系クラス《鍛冶師》のみに許される特別スキルである。

といっても、実のところ、多くの鍛冶師は他のクラスの片手間程度のものでしかない。

ある程度、自由にクラスの付け替えが可能なこの《オーリオウル・オンライン》では、戦士をやりながら一時だけ鍛冶師、というよう

なプレイスタイルが可能なのだ。

しかし、このような大規模な鍛冶設備を使えるだけの高レベルの鍛冶師は、サーバー内に百人もいるかどうか、というレベルだ。

数十万のプレイヤー人口に比して極端に少ないその理由は、はっきり言ってしまうえば、育てるのが大変すぎるからだ。

そもそも、鍛冶師のスキルは戦闘にまったく必要ない。それでいて、大規模な鍛冶が行えるまで育てるには、非常に膨大な経験値が必要となる。

しかし一方で、鍛冶師というのは、モンスタードロップしない特殊な武器をその手で製造し、時に折れた剣をすら修復出来る貴重な人材である。もっとも材料費が馬鹿にならないので、稼ぎになるわけではないのだが。

そういった意味で、S・E・Lのような専属の鍛冶師を持つギルドは、まさしくほんの一握りなのだ。

アイテムインベントリを操作して、昨日のうちに外しておいた装備関係を足元に出現させる。

修理してほしい武器はその辺においておけ、というわけだ。実際、他のキャラクターのものであろう装備が、その辺に転がっている。

不用心と思われるかもしれないが、実際、ギルドの内部で盗難が起こるなどありえない。それほど信頼関係を、このギルドは築いていた。

さて、それじゃあいくか——と踵を返しかけたそのとき。

カン、という一打ちとと共に、部屋の中に眩い閃光が走った。おっ、と振り向く。それはすなわち、作業が完了した証明だ。

鍛冶、といっても、これといった特別な作業は存在しない。

基本的に、素材を叩いて武器を作り、研ぎ石に掛けて剣を研ぎ、そして折れた剣を叩いて修復する。そしてその作業が終わったとき、武器が光り輝くのである。

しばらくして光が収まると、少女の手には、一本の美しい剣が出来上がった。

「御苦労さま、ミミさん」

ふう、と額の汗をぬぐう少女に一声かけると、はうあつ、と飛び上がるように反応した。剣を落としかけるところを危うくキャッチし、もう一度ふう、と額を拭う。

ミミ、と呼ばれた少女は剣を鍛冶台において立ち上がると、こちらへと振り向いた。

「もうっ、いつからいたんですか、カナメさん？」

「ん？ いや、ちょっと前からだけど……」

「声ぐらい掛けてくださいよう、びっくりしちゃいました」

ぷくり、と頬を膨らませてそっぽを向く。こう言っでは怒られそうだが、なんというか、実にカワイイ。小動物的な意味で。

ミミさん、と呼ばれたこの女性は、ギルドS・E・Lの専属鍛冶師だ。

そのかわいらしい見た目とは裏腹に腕は一流で、専属鍛冶師でありながら、割と依頼が殺到したりもする。

時折、リンからゴーサインが出て、外からの依頼もこなすわけだが……実際のところ、その理由の大半は、むしろ彼女自身に由来している気がする。

背は低く、しかし美しく流れる金の髪と白い肌が、まるで妖精のような雰囲気彼女に与えていた。それでいてこの性格なのだからファンがつかないことはありえない。

ちなみに、自分とはこの専属鍛冶師になる前からの付き合いで、その延長線上で、未だに武器を鍛えてもらったりもする。

「ごめんごめん。作業に集中してたみたいだから。……ところでそれは？」

「あ、はい」

苦笑しつつも問うと、ミミは手元にあった剣を掲げた。
黄昏色の刃と、美しい装飾。太陽の日差しを浴びれば、さぞ美しいだろうと思える意匠。

「……アーベントルーラーか」

アーベントルーラー
暁の守護者、という名前を冠した片手剣だ。鍛冶師、つまりミミによって作られた品で、それゆえに世界に一本しか存在しない。

「はい。リンさんに頼まれてたので」

「そういや、折れたんだよな、確か」

例のギガスとの戦いの後半、脛へ斬撃を加えると共に折れてしまったのだ。あの時はまったく表情を変えずに、剣を予備に交換して戦闘を継続していたが、あの剣を愛用していたリンはさぞ悔しかったことだろう。

ええ、とミミが頷くのを見ながら、まじまじと剣を見つめる。

「でも凄いな。完璧に修復してあるじゃないか」

「はい、なんとか。鉱石も余っていたので」

修復、というのはかなり難しい技術だ。

一度作成した剣を修復するには、その剣にあった温度の水と素材、そして何より高いスキルレベルが必要となる。特にアーベントルーラーのような強力な剣ならばなおさらだ。

そしてそれを難なく実行してしまえる、このミミという鍛冶師の腕は正に本物だ。

「ところで、カナメさんはどうしてここに……あ、刃研ぎですか？」
「そゆこと」

問われ、カナメは自分の置いた装備を指で指し示した。

「なるほど……これからどうするんです？」

「生憎、もう時間なんでね。俺はいったん落ちるよ。悪いな」
なるほどー、と頷くミミに、申し訳なく頭を下げた。

かくいう彼女も、昨日の飲み会にはきっちり参加していたのだ。まあ速攻で酔い潰れて眠っていたわけだが、疲れていたのもきっと同じはずだ。

だというのに、恐らくシャワーを浴びる間もなくこうして作業に没頭している。

「私のことは気にしないでください」

こちらの心中を察したのか、ふっと優しく彼女は微笑んだ。

「正直、昨日みたいな凄いイベント、近くで見せてもらっただけで十分です」

彼女はパーティには参加してはいなかったが、モンスターの反応圏外から応援していたらしい。もっとも、割と距離があったのでその声は届かなかったが。

ただ、そういったギャラリィはあの日四十人以上はいたと思われ、結構な緊張を強いられたものだ。まあ、誰かがうっかり圏内に入ることにはなかったので、特別問題があるわけでもないが。

「あ、言い忘れてました。S級ユニーク討伐、おめでとうございませす」

「ああ、ありがとう。それも、ミミさんの作ってくれた武器のお陰さ」

「ふふ、そう言ってくれるだけで十分ですよ」

言葉通りの嬉しそうな顔で微笑むと、「それじゃあ、作業に戻りますね」と積まれた武器の山へ向かっていった。

それじゃ、と手を挙げようとして……ふと思に至る。

「あ、そうそう。ギガースの落とした素材、ミミさんに使ってもらう予定なんで」

これは昨日、ギガースへ挑む直前に全員で決めたことである。いっそのこと、何か強力な装備を作ってもらおう、と。

「ほっ、ほんとですかっ!？」

カナメの言葉に反応して、すさまじい勢いで振り向いたミミが、星のような効果音を伴うかのごとく目を輝かせた。

「ああー、憧れのS級ユニーク……一体どんな武器が出来るんでしょう？」

刀ですかね、片手ですかね、と夢現状態で両手を組んで空を見上げる。

……ああそういえば、彼女の悪癖を忘れていた、と若干の後悔。はつきり言ってしまうば……いわゆる鍛冶バカ、なのだ。彼女に鍛冶を語らせると、一日あったって足りやしない。

……まあ、別に困るわけでもないんだけどな。そう思いつつ、「それじゃ」と巻きこまれる前にそそくさと退散した。



「やっぱりああいう時は、僕が前に出るべきなんですかね？」

……ログアウト後、飛び込むようにして風呂に入り、玄関のチャイムを鳴らして勝手に忍姉の家に上がりこんだ。

うーだと布団にくるまったままのスーパーニートを風呂に放り込み、適当かつ手軽に飯を作り、二人で食事。正直、なかなか親が帰ってこないのと、お隣のニートがいつも乞食だったせいもあり、飯の腕前だけは人に誇れるものになっていたりする。

そしてその後、再びのオーリオウル・オンラインへ。

ログインすると、既に大広間に全員が集まっていた。

修理を終えた武器を返却され、それらをまとめてインベントリに叩きこむと、大広間の一角にて、先日の《ギガース》討伐についての反省会と相成った。

「うーん、どうだろ。正直、ヒーラーが二人じゃちょっと層薄いし……」

ライの言葉に唸りながら答えると、俺の正面に腰を下ろした、紅色の髪をした少女……ユーリが片手を挙げた。

「私も同感。正直、サンちゃん一人じゃちょっと心許ないしねえ」
サンちゃん、というのは、この場にいないパーティメンバーの一人、@サンクレア@である。さばさばとした銀髪のお姉さんで、ライと同じくヒール要員の一人である。

しかし一方、ライは彼女とは違い、前線のタンク役としても活躍できるだけの強靱さと冷静さを併せ持っていた。ヒールも出来るため、彼はそんじょそらの壁役よりもよっぽど硬い。

とはいえ、ライのヒール技術はギルド随一だ。有名ギルドのサブリーダーだけあって、ステータスだけでなくプレイヤースキルも超一流。正直、彼の支援がなければ、今回の闘いは切り抜けられなかっただろう。

「私も同感だ、ライ。正直、ジグと私で、S級ユニークもそれなりに壁できるようだしな」

ジグ、というのも、ここにいない四人のうちの一人だ。クラスはグランドガード、典型的な壁構成だ。タンクビルド

一方リンは、タンクとアタッカーの中間、といったところか。避けつつも受け、受けつつも攻撃する。ライが後方の司令塔だとするなら、彼女は前線の司令塔だ。事実、彼女の指揮がなければ、前線はあっさりと瓦解していたに違いない。

「なるほど、確かに……。カナメさんのお陰で、アタッカー層も厚くなりましたからね」

「そうだな。この恩恵は大きいよ」

ライとリンに口々に賞賛され、むぐ、と言葉を詰まらせつつ、話題を別方向に修正するべく口を開いた。

「課題は魔法役じゃないかな。いくらユーリさんがいるっていても、魔法役が二人じゃキツイでしょう。S級の物理耐性を考えたら、出来れば三人は欲しい」

今回の構成は、ずばり前線四人、回復二人、弓二人、魔法二人だ。バランスがとれてはいるが、実のところ弓と魔法の一人ずつは、周囲にわいてくる雑魚の掃除がメインであった。

ここはいっそ弓を一人削って、魔法を増やしてみても……いやいやむしろ、属性持ちのガンナーとか……などと考えていると。

「あらあ。それはつまり、私じゃ不満ってことお？」

にやりと怪しげな笑みを浮かべ、ユーリがテーブルに身を乗り出して、こちらへとにじり寄って来た。

「はいい？」

いや、違う、そういう意味では——などと言いかけたところに。スパアン、と小気味の良い音が炸裂して、ユーリがテーブルの上で蹲った。

「馬鹿なことをしないで、真面目にやれ」

見ればその隣に座っていたリンが、いつの間に装着したのか片手にハリセンを持ち、青筋を浮かべていた。

対して叩かれた本人、ユーリは、ちえーと唇を突き出して、明後日の方を向いた。

「もー、リンったらまたそうやって妬いてー。女の嫉妬はミニクイよ？」

「な、なっ……!？」

冷やかすような言葉に、がたんっ、とその場で立ち上がり、真っ赤になってわなわなと震えている。

「あら？ ごめんなさい、冗談だったんだけど……凶星だったりして？」

てへ、と笑みを浮かべるユーリに、わなわなと震えるリンはこめ

かみに青筋を浮かべ……そして、目にもとまらぬ早業で、インベントリを開く仕草をした。

「き……さ、まあ……」

リンの手の中から、ハリセンが無数の青い粒になって消え去ると、今度はその逆送りを見るように、その片手に剣が生成された。

「げ……マズ」

対する少女も早業だ。同じくインベントリを操作して杖を装着。そして、脱兎のごとく逃げ出した。

「待て、ユーリ！ 今日と言う今日こそは……！」

「いやーん、怖い怖い。カナメちゃん助けて」

またもや始まる追いかけっこに、カナメは、深い深いため息を吐いた。

(02) 一 座談会(後書き)

※11／17 リンの名前間違えて過ぎてて吹いた。ということで修正しました。

(03) 一 花火

反省会も、特別大きな反省がないまま終わり……まあもつとも、今回は大勝利だったので当然なんだろうが、ともあれ解散と相成った。

そして今、夜の七時。

未だに俺は、《オーリオウル・オンライン》の中にいた。

……まあ、何をしているのかと言うと。

「た~~~~まや~~~~!!」

要約すれば、花火だった。

打ち上げられた花火が、パラパラパラという効果音を伴って光の花を咲かせ、そしてもう一輪——その隣でまた花が咲く。

おおおおーっ、という歓声のもと、集められるだけ集められた暇人、もといプレイヤーたちが、上空を見上げている。

そして頭上で、満点の星空と白く濁る円環の下、光の花がぱっと咲いた。

花火アイテム、というものがある。

こいつは、製造職の中でも最も趣味の色が強い『火薬職人』クラスによるものだ。まあ本来は爆弾なのだが、特別なスキルとアイテムがあればこれこの通り、リアルとまったく変わらない大きな花火も作れるのだ。

今回の花火大会は、ギルドの倉庫に眠っていたものと、新たにいくつか買い込んだものを、まとめて打ちあげて花火大会にしよう、なんて話になったのだ。

ちなみに発案者はミミさんで、全員を集めて回ったのは、なぜか顔が広い俺と人当たりのいいライだ。そこに、夕方になってログインしてきたギルドの面々も集まり、割と結構な人数で花火大会と相

成った。

花火大会が催されたここは、小高い丘のうえにある、一面の花畑だった。

周囲は見渡せる限りの絶景で、その中で打ちあげられる花火というのも、現実の日本では絶対に味わえないだろう感慨深いものだ。まあ根本的に、今リアルの季節は冬なわけだが。

そしてまた、上空に大きな花火が一輪。

あの下では今頃、ミミさんが花火アイテムをバンバン使って打ちあげているはずだ。

製造職を一通り網羅しているらしいミミさんは、なんでも花火アイテムをより派手に打ちあげるスキルも持っているらしい。とはいえさすがに申し訳なく、なんなら俺がやる、と買って出たのだが、曰く「これはこれで面白いし、一番近くで見れるから」とのことで、やんわりと断られてしまった。

相変わらず、あの人は職人の鑑だと思う。

「……何を考えているんだ？」

気遣わしげな声に、ふと横を振り向くと、そこにはいつの間にかリンが座っていた。

いつの間に着替えたのか、いつもの青と白の騎士服ではなく、浴衣姿だ。髪もポニーテールから結いあげられていて、いつもと雰囲気の違いが違って見えた。

そしてその表情は、どこか優しい。

ふわり、と花が舞って――不意に、わけもなくどきりとしてしまい、そっぽを向いた。

「ああ……いや。ミミさんは大変だろうなと」

「はは、確かに。でも実際、確かにあればあれで楽しんでるんじゃないかな？」

「そうなのか？」

問い返すと、ああ、と頷いた。

「一応、ちょっと行ってみたんだがな。何人か職人クラスの人が集まっけていて……結構楽しそうだったよ、打ちあげるのも」

「そうか……」

そして、またひとつ打ちあげる音が鳴って、空に光の花が咲いた。それを二人でじっと見つめながら……不意に、リンが言った。

「その……だな。カナメ……」

「ん？」

言われて振り向くと、なぜかリンは顔を真っ赤にして、地面をじっと見つめていた。

「その……なんだ。お前はああいうが、今回は本当に感謝してる。と、特につ、ジグが死んだとき、お前ひとりで三十秒もタゲを持ち続けてくれたろう？」

「ああ、あれか」

言われて、少し苦笑する。

「ありゃ正直、シノブ姉の弱体毒WPがないと速攻死んでたけどね」

そう断言できるほど、あの時のシノブ姉の立ち回りは、完全に神懸かっていた。

「そつ、そうかもしれないが、私はあの時の、その、お前の貢献が大きかったと思う！ そ、そそそ、その、正直ちょっとかつ——う「かう？」

わけが分からず問い返すと、いつの間にかリンの表情は茹であがったタコのごとく真っ赤に染まっていた。毎回思うに、VRMMOのこういう感情表現エモーションは少々ばかり大げさな気がする。

ごほん、とリンは仕切り直すように大きく咳払いして。

「その、なんだ。少し話があるんだが——」

「あ、ギルドに入れたのはパスな。いい加減ライを止めてくれよ……リーダーさん」

機先を制する形で、若干うんざりしつつ言った。実のところ、俺達を執拗に——と言うと表現が悪いが——ギルドの勧誘してくるのは誰よりライなのだ。正直、一週間で十回ほど言われたことがあり、その時は「勘弁してくれ」と思ったものだ。まあ……それでいて嫌味にならないのがあいつなんだが。

リンは「分かった」と少し頷いて……同時に、「いや」と首を横に振る。

「いや、そう言う話じゃなくてだ……カナメ」
「ん？」

と——再び、空に打ちあがる花火が音。

その音が大きかったので、首をそちらに向けると——ひたすら特大の花火が、空に一輪の花を咲かせていた。周囲から、再びの歓声上がる。

「その……カナメ。この後、少し、時間があるか……？」

周囲と同じように、それをぼけーっと見上げていたカナメの耳に、ふと届いた声。

視線を返すと、真っ赤に染まった顔のまま、彼女は真っすぐにこちらを見つめていた。しかし先ほどの声には、どこか不安と、緊張が混ざったような色があって——。



「いいんですか？ ユーリさん」

呼ばれて、優しい声に振り向くと、そこには金髪碧眼の少年——ライリツヒが立っていた。

言葉の割に、少しも心配していそうな気がしない。まあもつとも、この少年の笑みが崩れたところなど、戦闘中ぐらいしか見たことがないわけだが……。

「いいんですか、って何がよ」

ふん、と胸を張る。

まあ、問い返さなくても分かってるけど、と思いながら。

「カナメさんのことですよ……言わなくても分かるんじゃないですか？」

「だから、カナメが、どうしたっていうのよ？」

正直、自分は、この少年が得意というわけではなかった。

実のところ、こいつが一番の曲者なんじゃないかと思う。いつそこかのギルドのスパイでした、とか言われてもまったく驚かない。しかし何より厄介なのが……恐らく、コイツはそんな自覚なんてまったくなくて。きっと、心の底からギルドの一員として、自分たちを仲間だと思っているだろうこと。

そして、何より私がコイツを苦手としてるのは――

「……だって。ユーリさん、カナメさんのことが好きなんでしょう？」

――こういう風に、人の心を勝手に読んでくるところとか。

二人の視線の先では、リンとカナメが何やら話している。

まあ声までは聞こえてこないが、リンが赤くなったり青くなったり慌てたりしているの、内容はお察しの通りだろう。

「……それこそ、良いも悪いもないでしょ」

再び、空に花火が打ちあがる。

それを見上げないまま、ほんの小さくため息を吐いて。

「リンは決めてたんでしょ。S級ユニーク倒したら、気持ち伝えるって」

こんないい雰囲気、こんな綺麗な景色で……それに第一、リンが本当に心を決めたのなら。

私が出る幕なんて、本当にありはしない。

「大変ですね……大人って」

少年が言うや否や、インベントリーを高速で操作。右手に杖を出現させ、それでばかり——という効果音の割に割と強烈に——少年の頭を殴打した。

もつとも、私なんかよりも数倍は硬いだろう少年のHPは、1ドットほどしか削れなかったが。

「今度言ったらぶっ放すわよ」

杖を突きつけて言うのと、少年は「ははは」と小さく笑った。

実際に、大人という奴は大変だ。

いろんなものに見切りをつけて、いろんなものを諦めていく。毎日をただ生きるだけで、その先に何があるのかもよく分からない。

むしろいつそ、子供時代の方が、もつというんなものが見えてたんじゃないだろうか。

大人になれば、立派になるのではなくて——ただ擦り切れて、自分の放っていただろう光が鈍くなっているだけなんだと気づいたときには、もう完全に手遅れだ。

まあとは言っても、私はそこまでオバサンじゃない。まだギリギリで二十代前半だし。

確かにこの小柄なキャラクターには合っていないかもしれないが……。

だけれど、この自分とは正反対のようなキャラクターのお陰で、私はこの世界を愛せたんだろうと思う。この世界を愛せたから、リンと出会えて、S・E・Lと出会えて、カナメと出会えて……こんなにも仲間に恵まれた。

それ以上、望むものが何かあるだろうか？

私はもう、諦めるのには慣れてしまった。だからせめて、若い彼らには、いろんなものを諦めて欲しくないのだ。

いつかリンの恋が、彼女自身を傷つけることがあったとしても……

…その時は私が癒してみせる。

それは大人だからじゃない。友達だから。親友として……そして仲間として。

これ以上の得難いものを、私は知らない。だからそれ以上なんて望まない。

……だから、良いも悪いもあるわけがないのだ。

(……でも、もし生まれ変わることがあるなら)

それは、本当にどうしようもない、密かな……絶対に自分の胸の裡にしまっておくべきだろう、そんな想い。

もし生まれ変わることがあつて。

そのとき、彼と私が、結構近い歳だったりして。ばったりと、学校が偶然一緒になつて。

(……馬鹿ね。少女か、私)

自分の、そんなひそやかな想いを……しかし、隣の少年は見透かしたように。

「僕は結構、ユーリさんって可愛いと思いますけどね」

まったくもって、調子のいいおべんちゃらだ。

——次、同じこと言ったら、絶対ぶつとばす。

そんな想いを胸に抱きながら……少女の顔をした自分は、小さく笑った。

「だから、アンタは嫌いなものよ」



ただ、それを遠くから見詰めていた。私には、他に出来ることなんてなかったから。

「カナメ……」

名前を呼ぶ。今その少年は、少女と楽しそうに話している。

でもきつと、彼は気づいていない。隣に座る少女の気持ちに。

「カナメは……ニブチン、だから……」

だから、気づかない。

彼女の気持ちにも——そして、自分の思いにも。

蓮宮忍にとって、千堂要は弟分だった。

お互いに親が不在で、そしてたまたま家が隣で……気がつけばそういう構図で、いつの間にかそういう関係だった。本当の姉弟のよう

に育ち、そして歩いてきた。
自分が苦しいときも、悲しいときも、嬉しいときも、ずっとそばにいてくれた。

自分が言いたいことも、すぐに分かってくれる。
それだけ——それだけ理解してくれているのに。
なのに、この気持ちには気づかない。

（なんでだろう？　もしかして……気づかないフリ？）

ううん、それはないだろう。彼は、そんなことが出来るほど器用じゃない。

だとしたら……そう。やっぱり、ただ鈍いだけ。

「カナメ……」

分かっている。

きつと、自分のこの気持は伝わらない。

彼は気づかず、そして私は、その一步を踏み出す勇気がない。

だから、この一步は永遠に埋まらない。

——だけれど、きつと。リンは……あの子は、その一步を踏み越えるだろう。

その一步を彼女が踏み替えた時。自分たちはどうなる？　自分とカナメの関係は……何か変わってしまうのだろうか。

「……怖い」

怖い。それが怖い。ひたすらに怖い。

恋人でいてくれ、なんて言わない。ただ、自分の傍にいてくれるだけでいい。ずっとずっと、自分の傍で、いつもみたいに笑ってくれれば、それでいい。

けれど——そんな想いに、きっと彼は気づかない。

「そろそろ……卒業、なのかな」

彼から。そして、自分から。

互いに一人の人間として……彼に依存することなく、生きれるように。

思えば彼は、ずっとその手助けをしていてくれた気がする。

「ずっと……カナメに、甘えっぱなし」

彼も悪いんだ。甘やかされてしまうから、甘えてしまう他になくなる。そうに違いない。

だからきつと……彼女と付き合いだして、自分を甘やかせる余裕がなくなれば、自分はきつと自立できる。そうに違いない。

でも——でも。

「もし……生まれ変わったら……」

もしもこの世界が終わって。自分が死んで、カナメもまたいつか死んで。

そして来世——生まれ変わることがあるのなら。

自分とカナメは、何か、今とは違う関係を築けるだろうか？

姉弟のような二人ではなくて……踏み出せないこの一步を、踏み出せる関係に変われることが……あるだろうか？

(……馬鹿な……妄想)

そう、それは妄想だ。ただの妄想。
生まれかわり

転生なんてものはありえない。もしあったとして、再び出逢えることがあるのなら、それは奇蹟だろう。

（私と、カナメが恋人とか……変）

ああまったく変だ。想像がつかない。そんな未来、まったくもって想像がつかない。だから――。

（ずっと、思うだけなら……いいよね）

願わくば、奇蹟を。

しかし奇蹟なくとも……彼を想い続けることだけは。この胸の内側にある優しい想いを、ずっと抱えて生きていくことだけは、出来るから。

「カナメ……」

どうか、幸せになって。

これだけは、違いなく――蓮宮忍にとって、間違いなく本物の願いだった。

――かくして、花火大会は続いていく。
いろんな人の、いろんな想いを乗せて……それを空に打ちあげるように。



八時三十分。

公園のブランコに腰かけたまま、待ち人に片手を挙げた。

「よっ」

息が白く染まる――季節は冬。

あの後、「時間はあるか」と聞かれて了承した俺は、リアルの、リンの家の近くにある公園で待ち合わせすることとなった。

まあその理由は単純で、俺はスクーターがあるが、彼女は徒歩で来るしかないからだ。

実際、それよりも十分ほど早く到着した俺は、ブランコなどを漕ぎながら、彼女の到着を待ち――そしてきっかり三十分。相変わら

ずの完璧さで、少女は姿を現した。

もっとも、俺たちはもともしリアルでの知り合い、というわけではない。

しかし、S・E・Lの中でも特に付き合いのあるメンツ——リン、ユーリさん、ライ、ミミさんの四人とは、リアルで何度かオフ会を開いたこともある。

まあ最初は、ユーリさんのキャリアウーマン的な出で立ちにびっくりしたり、リンがゲームの中そのままの外見だったことに驚いたり、大変だった。

ちなみ、そのままというのは服装の話ではなく、顔の出で立ちの話である。

《オーリオウル・オンライン》において、アバターの顔は自動的に決定される。

といっても無茶苦茶な顔になったりすることはあまりない。なんでも、自分の深層意識を読み取って、そこから生成されるらしい。生成はやり直せるが、そこまで大幅に変化することもない。

そしてそれゆえに、あのゲームの中で、二つとして同じ顔は存在しないし、性別を変えてプレイすることも不可能だ。まあ声は変化しないから、顔だけ変えてもすぐ分かるだろうが。

とはいえ……本人の顔がそのままアバターになってしまう例は、間違いなく希少だろう。むしろリン以外には見たことも聞いたこともない。

まあ本人はそれなりに気にっていて、曰く「違和感がなくてやりやすい」らしい。

そしてライ曰く、「リーダーは根が正直すぎるから、それが出たんだと思いますよ」とのこと……実のところ、俺もこの説を推している。

まあ、ネットゲームの中でも話題になるほどの美人なので、当然、こちらで見てもその美しさはひとつとして損なわれていない。むしろ、リアルの方がどちらかと言えば魅力的に見える。

まあそれも当然だろう。

次世代VRMMOと謳われる《オーリオウル・オンライン》でさえ、表情の完全再現は果たせていない。リアルでは分かるシノブ姉の表情が、ゲーム内ではろくろく分からないように。

いくらリアルとはいっても、やはりゲームなのだ。リアルの彼女を見ると、毎回そんな想いに捕われてしまう。

「とりあえず座れよ」

「あ、ああ……」

隣のブランコを指し示され、どこかいつもより綺麗な気がするリングが、静かに腰を下ろした。ギィ、とわずかな音を立てると同時、口を開く。

「すまないな……。待たせたか？」

「いや、大して待ってないよ。思ったより車が少なくて早く着いただけさ」

こちらの言葉に、「そうか……」とだけ答えて、その後には静寂が満ちる。

お互いに無言のまま……俺は空の星空を見上げ、リンは地面をじっと見つめていた。まあ別にそのままでもこれといって文句はないんだが、静寂がなんとなく痛々しかったので、口を開く。

「……で、どうしたんだ？ 急に、時間あるかって」

「あ、ああ……」

「ギルド——じゃないって言ったか。じゃああれかな。次の狩りの話？ 誘ってくれるなら行くけど、回復アイテムがあんまり心許ないから……」

「いつ、いや……っ！ 違う。その……違うんだ」

思いつく話をつらつらと重ねていくと、ばつとリンが顔を上げて否定した。

じゃあ何の話なんだろう……分らず首を傾げる俺に、リンは、すうはあと何度かの深呼吸を経て、もう一度俺に振り向いた。

暗がりによく分らないが——なぜか、ここはゲームの中でもないのに、その顔が赤く染まっている気がする。

「その……ずっと決めてたんだ。S級のユニークを倒したら……って」

「？」

途切れ途切れの言葉と共に、リンが立ちあがる。

俺もそれを追うように、ブランコから立ちあがって……そして、振り向いたリンと、真正面から視線が合った。

「……私は。私は、ずっと……」

——そして、それはあまりにも唐突だった。

世界が白く染まっていく。

白昼夢、ではない。ただ世界が遠ざかって——遠ざかっていく。

「私は、ずっと……君のことが——」

その中で、ただリンの声だけが聞こえて。

そして、それすらも遠ざかって……。

「君のことが……——」

その言葉の終わりを聞けないままに。

世界は……ただ白く。

ただ白く――塗りつぶされていった。

(03) 一 花火(後書き)

「――ここは……本当にゲームの中なのか？」

そして、カナメが目を覚ましたのは、VRMMORPG《オーリオウル・オンライン》の中だった。

しかしどこか違う世界……どこか違う空気。

忘れ去られたもの。幻想と現実。生と死。

狭間で悩み、苦しみ、慟哭の果てで、カナメが下した決断とは――。

――次回、第一章『慟哭』。

こんな世界、俺は認めるわけにはいかないんだ……！

(04) 一 覚醒

——そして、俺は、花畑の只中にいた。

「……は？」

わけがわからん、どうなってる。正直、最初に思い浮かべたのはそんなことだった。時間は恐らく朝。ひんやりとした空気と、地平線近い太陽からしてそれは違いない。

なの、だが——

「これって……オーリオウルの中……だよな？」

それは、昨日花火をした花畑の丘だった。

見渡せる景色も、この花畑も、何も変わっていない。事実、薄く蒼い空の向こうで、白く濁る円環が俺を見下ろしている。

そう。ここは間違いなく《オーリオウル・オンライン》の中なのだ。

(……あれ？ でも俺、ログアウトしてたよな……)

ログアウトして、リンと話をして……なぜかウトウトしてしまったら、気がついたらここだった。

と言ってもそれはおかしな話だろう。VRMMOの中に入るには、ヘッドギアをつけてスイッチをオンにして、起動コマンドを唱える他に方法は存在しない。

もちろんログインした記憶などまったくない。第一、昨日はちゃんと宿屋に戻ってログアウトしたのだ。ログインすれば当然、その宿屋にいることになるはずだが……。

「どうなってるんだ……」

わけがわからない。

とりあえずどうしようもなく、はあ、と溜め息を吐きながら座りこむ。

「……とりあえず、ログアウトすつか」

あのときリンが何を言おうとしたのかも気になるし。それも妙に思いつめた表情で……。

（つかアレって、まさか……その、なあ？）

告白、とかいうヤツなんだろうか。

正直言って、そのテの体験談は俺の中に存在しない。

気になる女の子は何人か居たことがあるのだが、なぜかいつも俺の傍に張り付いているシノブ姉を見るや、早々に退散してしまうのだ。

（いやまさか……なあ？）

そんなアマアマな展開が俺の人生に存在していいんだろうか。

わけもなく動悸を速めながら、ログアウトすべくユーザーインターフェースを操作して……。

（あれ？）

……出ない。

右手を内側に振る。ユーザーインターフェースの起動コマンドはこれだけだ。そしてこれだけは、他の設定と異なり絶対に変更できない。

……はずなのだが。

（出ない……）

何度も何度も繰り返し、さらに一度深呼吸して、もう一度。しかし出ない。ユーザーインターフェースが……出ない。

「おいおい……」

ンなアホな。

（どんなバグだ一体……つか運営何してんだよ……）

ログアウトボタンは、ユーザーインターフェースの最下部だ。無論のこと、これが出せなければログアウト出来ない。

(つたく……)

仕方ない。かくなる上は、一度も使ったことのないサポートを呼び出すしかあるまい。あんまりやりたくはないが、しかし今の俺ならグダグダ文言いそうだぜまったく……。などと考えながら、オプション画面を開くべく、右手で円を描き……。

(ありゃ?)

……出ない。

ユーザーインターフェイスに続いて、オプション画面すらも出ない。

サポート呼び出しボタンは、オプション画面の右端に存在するものであり、当然これが呼びだせなければ、サポートを呼び出すことも出来ない。

(おいおい……)

確信犯じゃねえだろうな、運営。

というか、UIもオプション画面も出せないなんてバグ、今まで聞いたことがない。

そしてふと。ここに至って、嫌な妄想が脳裏をよぎる。

それは、前時代にあった小説の話だ。

V R M M Oのゲームにダイブし、そして戻ってこれなくなる……。……
という話。そしてゲームの中で死ねば現実でも死ぬ……。そんな話。フィクション

(……アホらしい)

そんなことがあるわけがない。

確かあの話は、V R 機器の出す高出力マイクロ波で脳を焼き切るとかいう話だったのだが……。もちろんのこと、現行のV R 機器にそんな機能は存在しないし、原理的にも不可能だ。

むしろ構造的に、二十四時間以上の継続使用さえもが不可能なのだ。よって閉じ込められるということもありえない。

「……ったく、どうすつか」

実のところ、サポートを呼び出す手段はオプション画面だけではない。

時折フィールドの設置されるオブジェクトに触れれば、サポートチームに直接連絡が取れる。そこに行けば、オプション画面を出さずともサポートを呼び出せる。

……の、だが。

（遠いなあ……）

そのオブジェクトがあるフィールドは、ここから町を挟んで逆側だ。徒歩で行こうと思えば、二時間ほどはかかってしまう。

転送アイテムでもあればまた別の話なんだが……。

駄目もとで、インベントリーを開くべく右手がZの文字を描いた。正確には「I」なのだが、一筆書き出来ないため面倒臭いし、一応こちらでも反応するはず——と。

「お？」

フィン、という小さな音と共に、水色のインベントリー画面が開いた。

（なんだ、こいつは開くのか……って！）

驚きつつもまじまじと画面を見つめ……そして詳細に見るまでもなく、驚くべきことが判明した。

「なんもねえじゃねえか！！」

転送アイテムどころか、回復アイテムもごっそりない。

あるのは、ゲーム開始時に与えられる幾ばくかの初期アイテムだけ。ナイフや布の服といった初期装備と、望遠鏡や初心者用のポーションだ。

「ってことは、これ新キャラ？」

しかし、一人が持てるキャラクターは一体だけ。新しく作りなおそうと思えば、以前のキャラクターを削除するしかない。

まあもちろん、そんなことをした記憶などこれっぽっちもないが……。

(どうなってんだよ……これこそ公式に言わねえと……)

試しに、右手でCの文字をなぞる。クラス画面の起動コマンドだ。インベントリーと同じように、フィン、という小さな音と共に画面が開いた。そして、その画面には――。

(……やっぱ、何もないか)

あれほど大量にあったクラスの一覧が、跡形もなく消えている。

現在のクラスは、これまた初期に設定されるクラス『平民』だ。

アイテムならまだしも、クラスは洒落にならない。クラスの取得には、本当に馬鹿馬鹿しいほどの時間がかかるのだ。

「冗談じゃねえぞおい……」

わずかな怒気を孕ませつつも口の中で吐き出して、はあ、と頭を抱えた。ウィンドウを全て消去し、深くため息を吐く。

とはいえ、ここでイライラし続けていても仕方がない。

他に起動できるものはないか、と、指がFの形を刻み――そして以前の二つと同じように、小さな音を立てて画面が起動した。

「……は？」

それはフレンド画面。当然、これが新キャラだとするのならば空のはず。しかし――その画面には、見慣れた名前がぎっしりと並んでいた。

(フレンドは残ってるって……どういうこった)

もはや意味が分からない。

混乱しつつも、画面に指を滑らせてスクロールさせていく……と。

(? 誰もいないのか……)

全員がオフライン。名前が点灯しているのは誰ひとりとしていなかった。

もったも、こんな時間帯であれば仕方ないのかもしれないが……

しかし、四六時中ダイブしているのではないかというシノブ姉までもオフライン、というのは珍しい。

うんうん唸っていたとき……不意に、耳にがしゃがしゃという鎧を鳴らす音が聞こえてきた。

振り向くと、丘の下部から重鎧に身を包んだ三人の集団が、ここへと登って来るのが見えた。動きからして、確実にNPCではない。どこからどう見てもプレイヤーによるパーティだ。

……と、三人のうちのひとりが、こちらを目視で発見したのか、指差してひそひそと話すのが見えた。そして数秒後には、がしゃがしゃと鎧の音を響かせながら、こちらへ走って来る。

一方、自分はいえ、不安と疑問がマックスの中で誰かに会えたという安堵感から、わずかにほっと息を吐き、近寄るべく歩を進めた。

むしろ現状を見るに、あるいはメンテナンス中にでも潜りこんでしまったのかという疑問があったのだが、もはやそれはないだろう。あっさりと払拭され、三人に近寄っていく。

かくして数分後。警戒心丸出しの三人に、なぜか槍を突きつけられていた。

「お、おいおい……何だ？」

まさかPKなのか、と嫌な予感がよぎる。

もつとも、今殺されたところで失うものなど何もないだろうが。

……槍を突きつけられた状況のまま、男のうちの一人、明らかに他の二人よりも偉そうな槍をもった男が、一歩前へと進み出てきた。

「見ない顔だな、貴様……何者だ？ 名を名乗れ」

「はあ？」

今度こそ盛大に素っ頓狂な声を出して、俺は疑問符を浮かべた。

見ない顔って……そりゃ有名人なんてことはないだろうが、この交易都市カリスでは、一応それなりに友人もいるし顔も利く。

それに、昨日に至ってはS級のユニークモンスターを倒したばかりじゃないか。確か、プレイヤー新聞にデカデカと顔が映っていて、正直ちよつとばかり鬱になったのだが……。

第一、名を名乗って、一体どんなロールプレイなんだよそれは。

などなどと、ぐるぐると思いを巡らせていたが、答えないこちらにいら立ったのか、ちゃきりと槍が鳴ったのを見て、分かったとばかりに両手を挙げた。

「俺はカナメ。カナメだよ。そうだな……ええと、身分？　それならアイツらが……」

と、そこまで言おうとして、ふと気づく。

ふと、目線が男の鎧に刻まれたエンブレムに吸いつけられる。それは……見間違いでなければ……。

「……アンタら、《銀楯^{S.E}の聖槍^L》のメンバーなのか？」

間違いない。それは《銀楯^{S.E}の聖槍^L》の紋章だった。

青の楯と一角獣。名前とは若干違うイメージだろうが、カリスにいてこの紋章を知らない人間は存在しまい。とはいえ正直、S・E・Lに所属するにしては知らない顔だが……。

「……そうだ。それがどうした？」

相変わらず警戒心むき出しのまま問われると、「はぁ？」と肩を竦めつつも言った。

「どうしたって、なら知ってんだろ？　俺はカナメだよ。ほら、昨日そっちのギルドと一緒に《ギガス》を狩った——」

「——何をしている」

ふと、俺の言葉を遮ったのは、聞き覚えのある鋭い声だった。

「隊長！」

ばっ、と俺を詰問していた男が、槍を挙げて敬礼する。

そして、その奥から進み出てきたのは——一人の、黒髪をポニーテールに纏めた少女。たなびく青と白の騎士服。

「……リン？」

それは間違いなく、どう見ても、彼女だった。



「……で？ 何をしている？」

俺の言葉が聞こえたのか聞こえなかったのか、よくは分からないが、リンは敬礼を続ける男に視線を巡らせた。男は、さらに背筋を伸ばして敬礼する。

「はっ！ 何やら怪しい男を発見しましたので、詰問を！」

「怪しい男？」

言いつつも、リンの鋭い視線が俺へと注がれる。

そしてその目を見て、彼女はやはりリンだと確信した。

この《オーリオウル・オンライン》において、同じ顔は二つとして存在しない。そして長年一緒にいた彼女の顔を、声を、俺が間違えるはずがない。

「……まったく。これのどこが密偵に見えるんだ、お前たち」

「はっ、しかし……」

「どう見ても町の人間だろうが。さっさと次に行け」

リンの鋭い声に、「はっ！」と三人が頷き、踵を返した。そして逆側へと足を勧めていく。それを尻目に、ぺこり、と小さくリンは頭を下げて――

「では、失礼した」

「ちょ、ちょちょちょ、ちょっと待ってっ！」

あっさりと背を向けて去ろうとするリンを、思わず全力で呼びとめた。ぴたり、と足を止め、こちらを振り向く彼女の顔に――しかし、そこには疑問しかなかった。

「おい……その、リン……だよね？」

「？ ああ……確かに、私の名前はリーンディアだが」

ああ、そうだ、確か本当のアバターネームはそんな名前だった…。

「いや！ そんなことじゃなくて、だ！」
気がつけば、俺は叫んでいた。

なんだ……なんなんだ？ 何か、おかしくないか？

「いや……リン。あれだ。なんつか、反応薄い？ っていうか…。」

うまく言葉が出てこない。喉が渇く。意味が分からない。

これは……これは、何だ？

ひたすら違和感に突き動かされるように、言葉を重ねる俺に、ふと、首を傾げて彼女が言った。

「ひとつ、気になることがあるんだが」

彼女の、真摯な疑問をそのまま前面に出したような言葉に、俺は思わず顔を上げた。

そして――

「……私は、君とどこかで会ったことがあったかな？」

その、瞬間。ピシリ――と、世界が凍った。

「な……に……？」

「ああすまない、失礼だったか。人の顔を覚えるのは自信があるんだがな……どうも思い出せない」

その言葉にウソはない。

長年の付き合いだから……それゆえにどうしようもなく、それが分かった。そう、長年の付き合いだから。

心に突き刺さるような鈍痛の中、そうだ、と言い訳するように、俺はひとつの考えに思い至った。アイテムもクラスも失って、つまりこれは新キャラになっているのではないのか、という疑問。

新キャラであるならば、アバターの顔も変わってしまったているの

では、という思い付き。

「ああ、アレだ。なんか、変なことになっちまって、分かりづらいかもしれないけど……いや、いいんだ。俺は、ホラ、アレだよ……」
声が尻すぼみになっていく。ああ、顔が変わってしまってるなら、分からなくたって仕方がない。

だというのに……だというのに。声は、どうしようもなく、尻すぼみに弱くなっていく。

——それがどうしてなのか。不意に気づく。

そうだ。もしリンなら……たとえ俺の顔が変わってたって気づく。声で、いやそうじゃなく、もっと違う何かで、きつとこいつは気づく。

だから、俺は怖いんだ。もしも、もしも——

「……俺は……カナメだよ。カナメだ。覚えてる……だろ？」

——こうまで言って。彼女に否定されたとしたら……俺はどうなる？

沈黙と、静寂。

痛々しいそれは……しかし、あっけなく。

「——すまない」

俺が縋ろうとしていた、

『顔が違うから』なんていう、意味もない仮説と共に。

「やはり、思い出せないな。……どこかで、会ったかな？」

——あっけなく、崩れ落ちた。

(04) 一 覚醒(後書き)

「例の小説」は皆さんご存じ、僕も大ファンの九里史生（川原礫）大先生のアレです。この場を借りて、勝手に引き合いに出してしまったこと、深く謝罪申し上げます……。

この小説はご覧の通り、某ゲームやら某小説やらの影響を精一杯受けておりますが、どうかその辺は御寛恕を……。

まあ、僕のネットゲーム遍歴はまた追々ということ。次話、さらなる混迷へ……。

(05) ー 完成された世界

どれほどの間、俺は放心していたのだろうか。
気がつけば、誰の姿もなく。

太陽は地平線から上り切り、朝から昼へと切り変わろうとしていた。

(何の……冗談だ、これは……?)

わけがわからない。言ってしまったばまさにそれだ。

あのリンが……俺の声を聞いて、名前を聞いても。それでも、分らないと言った。

「何の……冗談だよ……」

俺たちは、いつの間にか喧嘩していたのか?

俺は、いつの間にかあのリンにさえ見放されていたのか?

それとも、昨日のあの会話で、何かとんでもないことが起こって……。

「――クソッ!!」

だけれど考えれば考えるほど、わけが分からなくなってくる。

リンは嘘をつけるような奴じゃない。嘘をついたとしても、すぐに分かってしまうような奴なんだ。

さっきの言葉には、苛立ちも、怒りも、失望も、何もなかった。

あったのは疑問だけ。そんな風に演技するなんて器用な真似、あいつが出来るわけがない。

「何なんだ! 何なんだよこれは……!」

今すぐログアウトしたい。ログアウトして、実際に会って、事の真偽を確かめたい。

だけれど――それも出来ない。

「ふざっ……けんな——ッ！！！」

ガンッ、と地面を殴る。

「ふざけんなクソ運営がっ！ 何やってんだ！ 何で俺がこんな目に……！」

思いつく限りの暴言を地面へと放り投げ、何度も何度も地面を殴る。

しかし、それがさも当然であるかの如く。地面は、何のいらえも返さない。

そしてそれから十数分の間、思いつく限りの悪態をつき、ようやく少しだけ落ちついて、はあ、と空を見上げた。

空には、変わらず存在する、白く濁った円環が俺を見下ろしている。それは紛れもなく、ここが《オーリオウル・オンライン》の中である証左だ。

ただひたすら、空に浮かぶ雲を眺め……ふと気づく。

妙にリアルなのだ。空の色も、流れる雲も、風の匂いも、まるで現実の如くリアルだ。たとえ最先端のVRMMOでも、果たしてここまでリアルを伝えられただろうか？

もっとも、今までそんなことを気にしたこともなかったから、ただの気のせいなのかもしれない。……なのだが、妙に気になった。

——そして、そのままひたすらに空を眺め、どれほど経った頃だろうか。小さく頭を振って、立ちあがった。

「こんなところでグダグダしてたって、どうしようもないってか……」

それは確かにその通りだと思う。とりあえず誰か知り合いに会って、それで、お前を知ってると言ってもらいたい気分だった。シノブ姉がいらないなら、そう、行きつけの店のマスターでもいい。

そしてそれから、フィールドに出てサポートオブジェクトを探そう。

(……そうだ。そうするか)

とりあえず、さっきのリンの言葉も表情も、全てを頭から無理矢理に追い出して。

俺は、立ちあがった。



交易都市カリス。シリス王国の南西に位置するこの都市は、その名の通り、西の聖王域や南中原諸国との玄関口に位置する交通の要衝だ。

それゆえ、王国に行こうとする人、また出ていく人がここに集い、同時に物流の集まる都市である。そしてそれらの人々によって、ここは西側交易の中心都市の一角として、発展を遂げてきた。

——という設定である。もちろんのこと、交易都市なんて名前のついた町が、その名の通りプレイヤーたちにとっての交易の中心になるわけではない。

何せ、西側の聖王域だの南中原諸国だのなんてものは実装されていないし、転送アイテムさえあればひとつ飛びなのだ。

交通の要衝がどうか、なんていう設定は、それこそプレイヤーに関わり合いのないことである。

そういった意味で、この交易都市カリスは……そうだな、上から数えて六番目ぐらいに人気のある町だった。

周辺のフィールドのレベルは低い、しかし割と効率のいいダンジョンがあるとのことで、かつてはそれなりの人気を博した。しかしアップデートに伴って、さらに利便性のある町や都市が実装されるにつれ、徐々に寂れていった。

しかし赤レンガによって美しく舗装されたメインストリートや、名物の大噴水、さらに近郊にある花畑の丘は、一部のプレイヤーたちを魅了し、彼らはここを冒険の拠点として選んだ。まあそうして

ホームタウン

魅了されたのが、俺やシノブ姉、S・E・Lのメンツだったわけであるのだが。

——そう。そういう町、だったのだが。

「……なんだこれは」

本日何度目かの似たような声を上げて、俺は呻いた。

メインストリートにひしめく、人、人、人、人。そしていつもの数十倍以上はあるだろう、露店の山。

そこはまさしく——そう。見たことはないが、しかし確実に『交易都市』だった。

（どうなってんだ？ この街にこんなに人がいるのって、実装当初以来なんじゃ……）

溢れんばかりの人の波を、露店の裏を通り抜けつつも見つめながら、そんなことをひとりごちた。

（うーん……イベントか何かなのか？）

たとえば今から大規模なイベントがあって、それでこんなにも人が集まって、露店もわんさか。そういう話ならまだ分からないでもない。

……いや。それにしては、ちょっとおかしいか。

人の向かう方向が一定してないし、第一、武器も鎧もつけていない人間が多すぎる。

イベントは往々にして、何か戦闘が起こったり、ひょんなことからデュエルが起こったりするゆえに、基本的には装備を装着しての参加が常識となっている。

しかしストリートを歩く人間の大半、いやむしろ八割以上が、鎧はおろか武器すらも携帯していない。確かに装備関係はイベントリに入れておいた方が軽くて済むが、それが八割というのは実のところ、見たことがない光景だった。

首を捻りつつも、慣れた足取りで路地裏へと到達する。

例の店、『風見鶏亭』は、路地裏の奥まったところに存在していた。おおよそ一見では見つからないような場所だ。

なんでも、買える物件がそれしかなかったらしいが、最初の頃は『いつか移転してやる』がマスターの口癖だった。

しかし、いつしか俺の他にも、S・E・Lやらのメンツが通うようになり……どうやら店に愛着が出てきたしまったようで、気がつけばそんな話はどこへやらと消えてしまっていた。

（でも思うに、リンたちが通ってなかったら、早々に潰れてたんじゃないのかあの店は……）

なんでも、リンたちが通うようになってしばらくして、『S・E・L』が通う店ということでのいつの間にか口コミで広がり、客も段々と増えていった。もちろん、味は俺が一押しするほどにピカイチなので、興味本位で立ち入ってそのまま常連入り、ということも少なくなかった。

もっとも、あの侘しい雰囲気が好きだった俺としては少し微妙な気持ちなのだが、いつも賑わう時間から外れてやってきているので、あまり関係はない。

……しかし今は、常連の一人でもいてくれないか、と思わないでもなかった。

懐かしい記憶や、悶々とした想いを抱きながら路地裏を歩き……ふと、あることに気づく。

（NPCが……いない？）

基本的にノンプレイヤーキャラクターというのは、プログラムに定められたアルゴリズムによって動く存在である。だから定位置からはイベントがない限り動かないし、動いたとしても、プレイヤーと人間らしく会話することも不可能だ。

決まった動きしかせず、決まった会話しかない存在。それがNPCである。

しかし今日は、いつも同じところにいるNPCたちが、どこにも見当たらない。

（イベント中なのか？）

たとえばこの周辺にいるNPCたちがごっそりと、何かのイベントによって移動してしまった。

それなら分からない話ではないのだが……。

（そんなクエスト、聞いたことないけどな）

この街を拠点にしている俺たちは、この街で起こるクエストのほぼ全てを網羅している。大物から小物まで、一通りはクリアしたはずだ。

（……とはいえ、隠しクエストってことはあるか……）

別の町で発生して、この街で展開する。そういうクエストも無論あるので、そういったものの一つなのかもしれない。

などと考えながら歩いていると――気がつけば、『風見鶏亭』の扉の前まで到着していた。

その佇まいは、まるで変わっていない。

木造の古い扉、風見鶏を模した看板。ほっとわずかな安堵を吐きながら、俺はドアノブを握る。そして少し緊張しつつも、ギィ、と扉を押しあけた。

――おっ、よう。なんだ一人かよ？ 今日シノブちゃんはとうしたよ？

そんな言葉が俺を待っていてくれると、そう確信していた。

……だけれど。

「――いらっしやい」

マスターは俺を一瞥すると、それ以上は何も告げることはなく。

ピタリ、と俺は足を止める。

店の中には、常連の一人もいなかった。ほんの二日前にあったはずの、宴会の残滓のひとつも見当たらない。

鼓動がただひたすらに、俺の胸を締め付けていく。

何もない。——ここには何もない。いつもの、どこかほっとする空気が、まるで凍りついてしまったかのように、どこにも存在しなかった。

俺達はここで泣き、笑い、遊び、朝まで語り合った。友がいて、仲間がいて、俺はこいつらとずっとやっていければいいと思う思った。

けれど……その残滓は、もうここにはない。

俺は膝を折り、床に額を擦りつけて、ひたすら泣き叫びたかった。しかしそれをしなかったのは……直感を否定して、一縷の望みにかけようとする俺の愚かさゆえなのだろう。

ギィ、と椅子を引いて、腰かける。

それはカウンターの一番端。マスターの正面には座らない。

コツリ、と差し出されるコップに手もつけず、ひたすらに俯いて

——そして、絞り出すように言った。

「……マスター。この店に……常連はいるかい？」

「あん？ ……まあ、ぼちぼちな」

そうか、と呟く。

その声の調子は、違いなく……間違えようもなく、彼のそのまま
で。

俺は、声が震えるのを自覚しながら……

「……その常連に……」

ただ、絞り出すように、告げた。

「——カナメって男は、いるかい？」

……ああ、はっきり言って。

俺はきつと悟っていた。その答えが何なのか。

マスターが怪訝そうな顔をするのを直視できないまま、しかし俺は悟っていたんだ。

それでも、ほんの少し、ほんの少しだけでも希望があるなら。

縋らざるを得なかった。俺の中に燦る疑念を、ただ払拭したかったから。

——もしかしたら。

「……いや」

——こいつらが俺を忘れてるんじゃない。

「カナメね——知らないな。お客さんの知り合いかい？」

——全部、俺の勘違いだったらどうするのかと。

一縷の望みに縋って、ただひたすら逃避する俺は、どこまでも滑稽で。

だけれど……それを分かっている。

その滑稽さから逃れる術を、俺は何一つとして持っていなかった。



何度も何度も同じことを尋ね、拳句の果てに叫んで暴れ、そしてマスターに店から叩き出されるまで、いかほどの時間もかからなかった。

この段階に来て、俺は既に悟っていた。

（ここは以前に俺がいた、あの世界じゃない……）

きっとエミュレーターとか、そういうもので……リンやマスターも、同じ顔はしてても、ただのプログラムが動かしてるだけで……だから俺のことも覚えていなくて……。

もちろんのことそんな理屈など、自分で信じられるはずもない。VRMMOから脱出できなくなった、なんて眉唾よりもよっぽどあり得ない話だろう。

だが、しかし、それ以外に縋るものなどもはや存在しなかった。
(さっさと、ここから出よう)

ログアウトして、シノブ姉や、リンと会って……帰るんだ。
俺の居るべき場所に。帰るべき場所に。

だが、そう考えはしても……体までは動かない。
表通りに出たところで、ずるずると壁に背を預け座りこんでしまった。やはりどうにも、マスターやリンに忘れ去られてしまっていることが、結構堪えたらしい。

そんな自分を客観的に判断しつつ、天を仰ぐ。

やはりそこには、変わらず存在する白く濁る円環——オーリオウル。

俺はかつてこの世界を愛していた。もうひとつの現実として、友達がいて、仲間がいて。そんなこの世界を、きっと俺は誰よりも愛していたと思う。

なのに、これは何だ。この仕打ちは何なんだ。

一体誰が、どうして、どうやって？ そんな想いが脳裏を過ぎる間、ひたすら俺は空を見上げていた。

「あの、大丈夫ですか？」

ふと気遣わしげな声に反応して、俺は顔を正面へと戻した。

そこには、いつか見た女性の顔があった。緑の長い髪に、切れ長の目。確か、そう。前に一度だけ、シノブ姉と一緒に入ったパーティの人だ。名前は、もう忘れてしまったが……。

「あの……」

「……アンタ、俺のことを知ってるか？」

なおも氣遣わしげにこちらを見る女性に、俺はそんなことを言っ
た。

すると、女性は少し驚いたように目を見開いて、暫くすると「……
いえ」と首を横に振った。

「……そうか。悪かったな。俺は大丈夫だ。すまない」

そう言って手を振ると、そうですか、と彼女は俺から離れていっ
た。

……そういえば、と、その背中を見ながら思い出す。

新キャラ云々とかいう話があったが、今の俺はどんな顔をしてる
んだろうか？

不意に気になり、インベントリーを起動する。そこから、初期ア
イテムの中に入っている手鏡をクリックし、手元に具現化させた。
無数の青い粒と共に出現した手鏡で、自分の顔を覗きこむ。

……そして、少しだけ見て、かぶりと共に手鏡を消失させた。青
い光の粒が霧散し、手鏡がインベントリーへと移動する。

半ば、予想していたことではある。

空を見上げて、俺は深く溜め息を吐いた。

手鏡に映っていたのは、以前のアバター……即ち『カナメ』と、
まったく同じ顔だった。



それから、どれほどそうしていただろうか。

気がつけば太陽は地平線へと向かい、空を紅に染め上げていた。
もっとも、UIが開かないゆえに詳しい時間までは分からないが。

ようやく思考を落ち着かせ、ふう、と溜め息をひとつ。

(……宿屋に行くか……)

宿屋に行って寝てしまおう、と、そう思った。

このままフィールドに行き、サポートオブジェクトに触れるのもひとつの手だ。しかし、その場合は少なくともモンスターと遭遇することになる。

アイテムも装備もない今の状況では、少々ばかり面倒だ。

であるならば、宿屋で休み、二十四時間が過ぎるのを待つ。

そうなれば、AR機器の構造上、強制的にログアウトしてしまうはずだ。それに、今サポートと話せば、この理不尽な怒りをぶつけてしまいそうだったから。

服の埃を払って立ち上がって、歩きながら、ふと気づく。

そういえば、なぜ服に埃などがつくのだろうか。

そんなことは基本的にあリえない。服や土は所詮データでしなう、座るたびや触れるたびに土や埃がついていたのでは、とても処理が間に合わないのだから。

だから、服や鎧といった装備は汚れないし、土も埃もつくことはない。一方で、人の体にはつくのだが……まあこの辺まではギリギリ処理が可能ということか。

なのだが今、確かに服には土がついていたし、今も服の一部が少し汚れている。

(どういふことだ……?)

少し前から気になっていたことが、一つ存在する。

それは、この街があまりにリアルだと言うことだ。

NPCは見当たらず、人々はごく当たり前前に会話を交わしている。そして、ログインやログアウトしている人はどこにもいない。そこにあるのは、そう、リアルという名前の日常だ。

MORPGにとって、本当にリアルな、完成された世界はどう

いうものなのか、という話をかつて一度聞いたことがある。

曰く。人々が、自分をプレイヤーだと感じないことだ、と。

この世界で生まれ、この世界で生きる。それが当然だと感じていること。

しかし、そんなものはない。なぜなら、プレイヤーが自分という自我を保ったまま参加するのがMMORPGというものであり、そうである以上、『完成された世界』などありえるはずがない。

しかし——この光景は、どこかそれを彷彿とさせる。

完成された世界、完成されたMMORPG。

だけども……。

「気持ち悪いだけだ。そんなものは……」

密かに呟いて、チツ、と小さく舌打ちした。

そしてその想いは、宿屋の店主に金を渡し、部屋に転がりこみ、そして眠りにつくまで、延々と消えることはなかった。

(06) ー 認められない

――そして。

俺がログインして、二十四時間。

その時間は、もはや確実に過ぎ去っていた。

空に浮かぶ太陽は、地平線を過ぎて頭上にまで至り、今や燦々と光を照射している。

俺がログインしていたのは、昨日の朝。となればもう、疑う余地もなく確実に、二十四時間が経過している。

「なんツー……なんだよ……ッ!!」

ガンツ、と片手で壁を殴打し、さらに自分の頭を壁にぶつけ、もう一度空を見る。けれど、やはり現実是不変ならない。

正直言って。

朝起きたときに、半ば以上分かっていた。

なぜなら……この世界に来て。

俺の希望や望みが叶ったことなど、一度きりだってないからだ。

「チク、シヨウ……」

リンもマスターも、俺のことを覚えていなかった。

ユーザーインターフェースは開かない。ログアウトもできない。

サポートも呼べない。アイテムもクラスも一つも残ってない。フレンドも、ありはしても誰もログインしてこない。

そのすべて。そのすべてが、誰かの、俺への底知れぬ悪意にしか思えなかった。

「チクシヨウ……!」

しかし、まったく分からない。誰が。どうして。一体どうやって……。

がくり、と壁にもたれかかるように膝をつく。

(……俺は、帰れないのか?)

これが、誰かから俺への悪意だとして。

俺をここから逃がすだろうか? サポートオブジェクトを探して、触れて……それで全てが解決するだろうか?

——それは、考えにくい。

(俺は、帰れないのか?)

今も思い出すのは、あの楽しかった日々だ。

リン……シノブ姉……ユーリさん……ライ……ミミさん……。あれから、たった一日しか経っていない。経っていないのに……あの日に、あの空間に。

俺は、二度と、戻れないのか?

「認められるか……」

歯を食いしばる。その隙間から、まるで自分のものではないような、怨嗟のごとき言葉が這い出ていった。

「認めて、たまるか……」

たとえば、これが誰かの悪意によるものだったとして。

もうみんなに会えない。もうあの場所に戻れない。そんなことは、断じて――

「認めてッ、たまるかよ――ッ!!」

流れ出た言葉を原動力に、俺は立ち上がった。

出来ることを。今出来ることを、ただするために。



(目指すは、サポートオブジェクトか)

サポートオブジェクトは、フィールドに設置された、黒い柱のようなものだ。

サイズとしては大きくない。出来る限り景観の邪魔にならないような位置に置いてあり、それと同時に、非常に見つけやすい位置にあるのも特徴だ。

普通に街道を通っていれば、まず見過ごすことはありえない。

（問題は、あるかどうか、か）

これがもし完全に、俺に対しての悪意だというのなら、そんなものを残してはおかないだろう。

もっとも、その仮説自体苦しい話だ。実際にこの中には、NPCではありえないようなプレイヤーたちが、数多く存在しているのだから。

あの挙動は、アルゴリズムではありえない。プログラムだとは考えにくいだろう。

かといって、この世界にいる千人、いやあるいは、一万人以上かもしれない全員が、俺を貶めるためだけに協力している、ないし嘘をついてるというのも、無理がありすぎる。

……まあ、それはいい。

とにかく脱出する術を考えよう。考えるのは、それこそ後でいい。

何はともあれ、装備を整えるのが先決だった。

初期装備のままでは、サポートオブジェクトが存在する南西フィールド、即ち《イズリ平原》を出歩くには心許ない。わざわざ死に返るのも億劫だ。

幸い、昨日のうちに気づいていたが、金についてはまったく減っていない。かなり余裕があるので、装備ぐらいいは簡単に整えられるだろう。

「さて、武器屋はこっちか……」

よくある初心者用の武器屋に足を運ぶ。そういえば、あそこの店主はNPCだが、そのままなんだろうか？ などと思いつつも歩を

進めていく——と。

「——おい、その君！」

唐突に呼び止められ……正直、振り向くかどうかはかなり迷った。なぜならその声は、聞き覚えのある少女のもので——。

「おいっ、その君だ、君！ 聞こえているか？ ええと……」

「……カナメ、だ」

ずかずかと近寄って来た相手に、溜め息を吐きながら振り向いた。そこに立っていたのは、黒髪をポニーテールにまとめた見慣れた顔。リンだ。

いいや——正確には違う。こいつはリンなんかじゃない。名前も顔も声も同じでも……こいつはただの別人なんだ。

「ああ、そうだった、カナメくん。やあ、先日はすまなかったな」

「……いや」

さっさと終わってくれと思いながら応じる。

その一方で、実のところ昨日のアレはどっきりだったんだ、なんという展開が待ってはくれないかと、心のどこかで願う自分がいるのは、やはり、俺が弱いからなんだろう。

努めて顔に出さないようにしているこちらを尻目に、リンは肩をすくめて口を開いた。

「任務中だったのですね。なんだかよく分からないが、ショックを受けていたようだから、一度きちんと謝っておかなければと……」

「……お気になさらず。俺も気にしてませんから」

努めて冷静な声を出し、「それじゃ」と片手を挙げて去ろうとする。

「おいおい、どうしたんだ？ 昨日は……」

「昨日は昨日だ。頼むから、俺に——っ？」

ふと唐突に、周囲からの……何か強烈な視線を感じ、言葉を止め

た。

見れば周囲を歩く何人かの人間が、ぶしつけに俺たちに目線向け、さらにそのうち何人かが、立ち止まって険呑な表情を俺に向けていた。

（な、なんだ……？）

と、遅ればせながらリンもそれに気づいたのか、周囲を見渡して「ああ……」と小さく頷いた。そして、おもむろに俺の手を取る。

「おっ、おいっ!？」

「すまない。悪いが、少し黙ってついてきてくれないか」

……アンタが俺の手を取った瞬間に、さらに強烈な視線ビームが俺に注がれているんだが。

そんなことを思いつつも……久々に感じたリンの感触と体温に、何も出来ないまま、俺は引きずられるように人込みを歩いていった。



「すまなかったな」

目的地を聞かれ、とりあえず武器屋だと答えた俺のリクエストにより、何やら彼女が顔なじみらしい武器屋へと俺たちは足を運んでいた。

ようやく手を話してもらった俺は、ふう、と溜め息を吐きながら答える。

「いや、いいけど。なんなんだあれは」

「ああ、私もよく分からないんだが……どうも、私が誰かと話しているとおあいうことになってな。特に相手が男性だと酷くてな。まあよくわからんのが正直なところだが……」

——こっちでも存在してんのかよ、リンのファンクラブは。

半ばあきれ果てたような表情で溜め息を吐く、その一方で、どこか懐かしくも温かい気持ち俺の胸を包みこんだ。

——そういう昔、リンのファンクラブに脅迫状送られたことがあ

ったつけ。

文学スキルなんて、マイナー中のマイナー、誰が習得してるんだっていう『ミンストレル』クラスしか持っていないのに、わざわざ便箋付きときた。ありゃさすがにちよつと怖かった……。

「……なんだ、笑えてるじゃないか」

「え？」

くすりと安心するような、あるいは微笑むかのような声に、俺は思わず口元を押さえた。どうやら、知らず知らずのうちに笑っていたらしい。

「いや……先ほどの君の顔は、ちよつと怖かったからな。そういう風に笑える余裕があるなら、そこまで心配はいらないのかな？」

「……………」

そう言つて微笑む声に、しかし、俺は何も答えることが出来なかった。

余裕があるか、と聞かれれば——ないだろう。あるわけがない。自分でも分かる。

もしも……もし。

サポートオブジェクトに辿りつき……それでも、何もなかったら。俺はその時一体どうすればいいんだろう？ いや、どうするべきなんだろうか？

戻れないなんて、みんなともう二度と会えないなんて、俺には絶対に認められない。

だけれど、もしも本当に道が断たれてしまったら……その時は……。

「……………さて。武器屋に来たということは、武器を探していると
いうことかい？」

「あ、ああ」

リンに問われ、こくりと頷く。とりあえず、初期装備のナイフだ

けでは心許なすぎる。

俺が頷くのを見て、しかしリンは「うゝん」と顎に手を当てて唸った。

「？　なんだ？」

「いや……そうだな。まあ、一応聞いておくが」

わけがわからず首を傾げる俺に、リンは腰に手をあてて半ば呆れたように口を開いた。

「武器を購入するには、騎士団の許可と冒険者の資格がいる。一応聞くが、持っているかい？」

……なんだそりゃ。

その気持ちが思いつき顔に出てしまったのか、フウ、と彼女は肩をすくめた。しかしその仕草がまたリンそのもので、俺を若干苛立たせた。

しかし、資格っていうのは《冒険者》クラスのことだろうが……騎士団の許可？　騎士団って何だ一体。少なくともオー（ま）——リえせオウル（の）——オンラ（か）——インでは聞いたことがない。

わけがわからない、といった表情の俺に、彼女は小さく苦笑して、そしてこう言った。

「ところで、どこに行くつもりなんだい？　武器が必要ってことは、どこかに行くんだろう？」

「あ？　ああ……南西の、イズリ平原だけど」

「イズリ？　あそこか……なるほど」

思わず答えてしまった俺に、ふむ、と唇に手をあて黙考したあと、ひらりと白青の騎士服を翻し、武器が陳列されている棚の方へと歩いていった。

……あいつは、リンじゃない。

さっきから何度も何度もそう思うのだが、しかしそれにしては、仕草のひとつひとつ、表情のひとつひとつが似すぎている。だから

なのか、思わず素直に返事を返してしまい……まったくもって、調子が狂ってしまう。

はあ、とむしゃくしゃした心のまま頭を掻いていると、「カナメ君」という自分を呼ぶ声に、思わず振り向いた。

そして振り向いた時には既に、彼女の手元から一本の剣が、俺の手元へと投げられていた。

「つと……！」

思わず柄を取って受け取る。まあもともと鞘に収まったままなので危険と言うわけではないし、第一抜き身であっても、ここは町中——安全圏内なので、ダメージを受ける心配もない。のだが、いきなりは心臓に悪い。

投げた方は、さして気にした様子もなくそのまま店内を物色しつつ——そして、背中越しに言葉をかけてきた。

「どうだ？ 振れるか？」

ウェイト

要するに、その武器の重さは装備できるのか、という意味だろう。もともと、クラス上の制限に引っ掛からなければ、重さによって装備できないは存在しないが、使い物になるかどうかは別問題だ。

つまり筋力値が十分ないと、重い武器を振り回すことは難しいのだ。十分に威力を発揮できないし、すぐに疲れてしまう。しかしこれがパラメーターとして表示されないものだから、しばしば自分の筋力の限界を越えた武器を扱い、結果として墓穴を掘る人間も少なくない。

言われて、鞘に入れたままぶんぶんと剣を振り回してみる。

……ふむ。まったくもって重さを感じない。むしろ軽すぎるぐらいか。

「もう少し重くても振れるな」

「ふむ、なるほど。ま、今日はその辺にしておけ。あとはこれとこ

れ……」

どうやら強がりと思われたらしい。軽くむっとしつつも、正直、彼女の取る行動が意味不明すぎて、俺にはさっぱり理解できないまま立ち尽くす。

そして、それから数分後。装備一式を抱えてきたリングが、ふうと額の汗をぬぐった。

「よし、こんなところか」

「……何がだ？」

正直、俺はまったく意味が分からない。

こちらの言葉に、若干驚いたように目を見張って、次いで少し照れたようにコホンと咳をした。

「さっきも言っただろう？ 武器を買うには騎士団の許可がいる。だがそれは買う時の話だ。装備する分には何の問題ない」

「……なるほど。それで？」

「要するに、まあ、私を買ってやれば問題ないということだな」
言って、にこりと彼女は笑った。

その言葉に――俺は思わず、眩暈がするように頭を押さえた。

（なんなんだ、この女……）

今の言い方……考え方……やり方……まるで本当に――。

「？　どうかしたか？」

「……いや。なんでもない……」

努めて考えないようにしながら、俺はかぶりを振った。

そう。確かに今のままだと、冒険者になるためのクエストをこなさなければならないし、騎士団の許可とかいうのもいまいち謎だ。

さっさと行って、さっさと解決してしまいたい。それなら、この女の事情がどうであれ、利用するに越したことはない。そう、ただそれだけのことだ。

そう思いつつ、素直に従う。

女がレジに持って行ったのは、ごく平凡な革防具一式と、スチールソード一本だ。革防具は初級中の初級防具だが、スチールソードの武器ランクは若干高めだ。

片手剣としてはアイアンソードの上位に位置し、扱いやすく強度に優れる。初心者用としてはなかなか良い武器だ。

リンがレジにアイテムを置いて、しかしそこで初めて、そういえば店員がいないことに気づく。リンもそれに気づいたのか、ちりーん、とレジに置いてある呼び鈴を指で弾いて鳴らした。

店内に響く音と共に「はーい！」というかわいらしい声。そして、それと共に出てきた、小柄な影は――

「……ミミさん!？」

金の髪、透けるような白い肌、そして低い背丈。

妖精のようなその出で立ちは、間違いなく、S・E・Lの専門鍛冶師であって……しかし同時に、自分がまたもや同じ失敗をしてしまったのだと悟った。

「ミミ、知り合いか？」

「あの……そのう……」

リンの言葉に、困ったような声を出す彼女に、今度は「いえ」と自分で呟いた。

「すみません、人違いだったみたいです。知り合いに似てたので」
彼女は確かにS・E・Lの専属鍛冶師だったはずだ。しかし、この武器屋にいるということは……つまり、彼女とあのミミさんは、同一人物ではないというその証左。

それを一人で納得して、かぶりを振りつつも頭を下げた。

「似てたって、今名前を……」

「偶然、名前が同じだっただけです」

啞然と言葉を紡ぐリンに即答して、俺は「大丈夫」とかぶりを振った。

……何が大丈夫だ。

心の中で小さく呟く。リンと、マスターに続いて、ミミさんまで。こうまで知り合いが続き……そしてその全員が、自分のことなどまるで覚えていない。

まるで、何か悪い悪夢を見ているようだった。

(……会いたい)

会いたい。みんなと会って、話をしたい。

お前のことを覚えてると、そう言って欲しい。

その想いを無理矢理に胸の奥に引きずりこみ、俺は俯きながら、深く深く息を吐いた。

その頃には、リンが清算を終えて、俺の方へと向き直っていた。紙袋に入れてもらったらしい防具一式と、黒い鞆に収まったままの剣とベルトを差し出してくる。

俺は「ありがとう」すら言えないまま受け取って、無言のまま、ミミさんから背を向ける。

同じくなぜか無言で武器屋の扉へ向かうリンを追いながら、俺は背を向ける。

「あ、あのっ！」

不意に、背後から聞こえた声に、俺は足を止めた。けれど、振り向くことはしない俺の背に——そっと優しく触れるような、ミミさんの声が聞こえた。

「その……確かに、あのう……覚えていないというか、見覚えがないというか……」

自信なさげに震える彼女の声は、しかし、精いっぱい勇気を振り絞るように——。

「あの……でも、また、もう一度……また、来てもらえますか？」

「……………どうして？」

言っただけの後悔が、何もなかったと言えば嘘だろう。ミミさんの、少し傷ついた顔に、俺は手を振って「大丈夫」と言っただけだった。

けれど出来ない。出来ないのだ……そんなことは。

これは本当のミミさんじゃない。ここは俺が本当にいるべき場所じゃない。だから……。

悶々と考える俺の背後で、少し傷ついたような顔をして、しかしミミさんは、小さく頭を振った。そして――

「確かに覚えていませんが……でも……」

「でも？」

ミミさんは、少しだけ、戸惑うように視線を泳がせて。

「初めて、会った気がしないので」

俺は、その言葉に。

「――ッ！」

何も返せないまま、齒を食いしばった。

これが、ミミさんなりの商売方法で、お客さんを失いたくないという一心から出た言葉。……なら、どれだけ楽だっただろうか。

知っている。よく知っている。彼女はそんなおべんちゃらなど使わない。

思ったことしか言わないのだ。それほどまでに純粹。それほどまでに清純。

それが分かっているから……分かっているけれど！

ここで、ミミさんの望む言葉を言っただけ……俺は、引き返せなくなる気がした。

サポートオブジェクトは反応せず、ここから抜け出せず……。

そして――みんなと、もう一度会う方法を、永遠に失う。

理屈なんて何もない。だけれど、そんな気がしたから。

「……すみません」

頭を下げて、俺は扉へ向かう。

背後で、彼女の声が何か聞こえた気がしたが……俺は、もう二度と足を止めることなく、その武器屋を後にした。

(07) ー 幻想の終わり

武器屋の外に出ると、どこか悲しげな瞳で、リンが俺を待っていた。

俺はそれを無理矢理意識の外に追い出し、南西のゲートへと足を進める。

さっさと行って、さっさと終わらせてしまおう。

考えられるのはそれだけだった。ミミさんの傷ついた顔も、リンの悲しげな瞳も、もう何も気にせずに。

そして、歩きだした俺の後を黙々とついてくる、ひとつの影。

見もせずとも、それが誰なのか分かる自分に、少し嫌気が差しながらも――はあ、と溜め息をはきながら振り向いた。

「……おい」

「うん？」

声をかけると、そこに立っていた白と青の騎士服を着た黒髪の女性――リンが、小さく首を傾げた。

本物のリンとまったく同じ仕草に、密かに苛立ちながら……小さく舌打ちする。

「……何でついてくるんだ」

「なんで？ そりゃあ、君を護衛するためだが」

「護衛だと？」

肩をすくめたリンは、俺の言葉に「ああ」と頷いて、その細い指がずっと南西の門を指差した。

「どうせ、一人で行くつもりなんだろう？ 君はどこからどう見ても一般人だからな。護衛もなしでは、衛兵が通してくれないさ」

「なんだって？」

どういう意味だ？ クラスが『平民』だと、衛兵が通してくれない

いつてことか？

だが、平民クラスであっても、特定以上のクラスの護衛がついていれば、町の外に行ける……とういうことなのか。

確かにこの周辺のモンスターは、平民クラスだと少し苦勞するかもしれないが、倒せないことはないというのに。

とはいえ、と、俺はここからギリギリ見える南西の門を見やった。そこには、まるで仁王像のごとく直立不動で、行きかう人々を監視している兵士が二人。そしてその向こう、門をくぐる人々を、荷を含めてチェックしている兵士が四人。

確かに見る限り、軽装で門を潜っている人間は一人もいない。

「まあ、北や東ならいいんだが。南は少し危険だからな」

肩をすくめてリンが言うと、俺は頷いて、同時に首を傾げた。

「……なるほど。だから、アンタが護衛役で俺を通してくれると？」

「そういうことだ。それも、特別に無料だな」

彼女がにこりと笑ってウィンクし、トンとこちらの肩を叩く。それに……しかし、俺はわけもなく怒りがわきあがった。

「……なんでそこまでする」

「なんで？」

「アンタは他人なんだろう！！」

怒りに衝き動かされるままに放った言葉は、ぴたり、とリンの動きを止めた。

ああ、とどのつまり、俺はずっとストレスが溜まっていたんだ。

いつもと同じように俺に接するリン。しかし彼女は俺を覚えていない。リンと同じ表情、同じ仕草、同じ声……でも彼女は、俺の顔も声も覚えていない。

その矛盾が、ずっとずっと、俺の中に見えない怒りとストレスをため込んでいた。

「他人のアンタが、俺に構う理由なんて何もないだろ」

だというのに。

武器屋に連れて行ったり、護衛をするなんて言い出したり……。

「そんなこと——頼んでなんかないだろ!!」

ああむしろ、いっそ、突き放してくれればいい。

こいつは知らない奴だ。おかしい奴だ。お前なんて知らない。赤の他人だ。

そう言ってくれていい。突き放してくれていいんだ。ここにいるリンは本当のリンじゃない。ただの赤の他人。俺が帰れば全て丸く収まって、本当のリンに会える。

——それでいい。何の問題もありはしない。

俺の、吐き出すような言葉に、リンは少しだけ顔をしかめて……そして。

「……そうか。確かに私は、ただの他人かもしれないな。だけど——」

小さくかぶりを振って、しかし微笑むように、こう言った。

「——君とは、初めて会った気がしないからな」

「……っ!!」

それは、先ほどミミさんから言われて、俺が背を向けた言葉と同じであり。

奇しくも、俺がかつてリンに言われた言葉と、まったく同じだった。

——なあ、どうして俺たちに構うんだ？

——どうして？

——だってさ。こうやってギルドの誘いも断り続けてるわけで……。

——ふむ。

——まあ……ギルド員でもない俺たちを、どうしてここまで誘ってくれるのかな、と。

——ふむ……そうだな。それは……

——それは？

——なんとなく……君とは、最初に会った時から、初めて会った気がしなかったから……かな？

思い出される会話。懐かしい記憶。愛しい世界。

その全てが、俺の胸に、鋭い棘となって突き刺さった。

「……っ！」

くそ、くそっ……なんだ。なんなんだ。

リンじゃないんだろう？ 本当のリンじゃないんだろう？

お前はリンじゃない別の誰かで……なのになんで……なんで……。

「リン……」

「うん？ どうした？」

懐かしい名前を呼ぶ声に、帰ってきた言葉は……思いがけないほど俺の胸中に、限らない寂寞を漂わせた。

かぶりを振る。

今はいいんだ。忘れていい。忘れていい……。

「……分かった」

そう言って、俺は頷いた。

確かに、護衛がなければ門を出れない。別の護衛を雇う方法も知らないし面倒だ。

この女が何を考えているか、なんてことはまったく分からない。だが、今はせいぜい利用させてもらうとしよう。

「タダで良いって言うんなら乗ってやる。……行こうぜ」

「ああ、行くとしよう」

リンは頷き、俺の前を歩いていく。

俺はその背を負いながら——正直、横でなくて助かったと思った。きつと、今にも涙が溢れそうになっているだろう俺の顔を、見られずに済んだのだから。



門は、リンが一言二言衛兵に話すと、あっさりと通してもらえた。むしろ平民一人では通過できないなんていう話も、実は嘘だったのではないだろうか、とも思えてしまうほどだ。

そしてその後、とりあえず鎧に着替えたのだが……コイツが妙に手間取った。

普段は、インベントリからステータス画面のエクイプ欄に移動させるだけでいい。が、ステータスが開かない以上、どうにも自分の手で装着しなければならぬらしい。

着方がさっぱり分からず、リンに手伝ってもらいながらどうにか装着し……ようやく出発と相成った。

フィールドに出ると、やはり見なれた光景に飛び込んできた。なだらかな曲線と、舗装された道、そしていくばくか見えるモンスターたち。

イズリ平原に出るモンスターは、せいぜいがランクEまでの初心者コースだ。よって、平民だろうが問題ないだろうとタカを括っていたのだが。

「……なさすぎる」

問題が、というよりも、むしろ歯応えが、というべきか。

サポートオブジェクトを真つすぐに目指して突き進み、出会うモンスターは斬り捨てていくという方法を取ったのだが、なんというか、モンスターにまったく歯応えがない。

クラスが『平民』ということでも多少なりと警戒していたのだが、

そんなものはなんの意味もなかった。

ザッ、という音と、蛙の鳴き声。それに俺は刃を振る動作で反応。横合いから飛びかかってきた大蛙《ビッグフログ》に、慣れた動作で逆袈裟斬りを放ち、跳ねあがった銀色の刃がモンスターを両断する。

ヒットポイントを意味する赤いバーは、たった一撃で左端までスライドし、断ち斬られた《ビッグフログ》は無数の青い光の粒となって虚空へと溶けていった。

いくらなんでも弱すぎる。

スチールソードは確かにそれなりの武器だ。しかし、Eランクモンスターとしてはやや強めのこいつを、クリティカルもなしに一撃で倒せる威力はないはず。となると……。

(ステータスは変化してないのか?)

その結論に思い至って、俺はなるほどと頷いた。

ステータスとは、ストレングス、バイタリティ、アジリティ、イマジネーション、筋力値、頑強値、速力値、精神力の四つから成る、キャラクターの根幹を成すパラメーターだ。

基本的にこれらの値は、ステータス画面では参照できない隠しパラメーターとなっている。ステータス画面では、装備やクラスを全て加算した攻撃力や防御力が表示されるのみだ。よって呼び方もあるによって異なるが……まあ今はそれはいい。

ステータスはレベルと共に増加し、そしてクラスによって増減する。この場合、俺のクラスは『平民』、すなわち補正値はゼロであるので、素のステータス、即ちレベルが高いままということになるだろう。

確か、以前の俺のレベルは九十七。

クラスによる補正がまったくなかろうが、このあたりのモンスターなどではちっとも問題にならない。

「まったく、凄まじいな。……君は本当に一般人なのか？」

呆れた声で言われて振りかえると、リンが溜め息を吐きながら、消えたモンスターたちが落としたアイテムを、インベントリーへと叩きこんでいた。

レアアイテムでなければ、モンスターたちが落としたアイテムは、モンスターが死んだ場所に落ちる。しかし妙にがめついことをするな、と思いながら俺は頷いた。

「まあ、そういうことになってる。クラスも平民だしな」

「ふうむ、なるほど。むしろいっそ、高名な剣士と言われた方が納得できるがね」

曖昧な俺の答えに、そう答えつつも採集を追え、さて、とリンが服の埃を払った。

「では、行くか。この先なんだろう？」

「ああ」

答えて、また歩き出すと、しかしすぐに横に並んだリンが話しかけてきた。

「しかし、本当に凄いな。私はさっきから、一度も抜いてないぞ」

「少しは手伝え。護衛なんだろうが」

リンの言葉にそっけなく返すと、彼女は苦笑した肩をすくめた。

「私が手を出すより前に、君が全部片付けてしまうんじゃないか。これは護衛なんていらなかったかな？」

「……かもな」

曖昧に頷くと、「ふっ」と小さくリンが笑った。

……気がつけば、なぜか俺たちは普通に会話できるようになっていた。

いやむしろ、鬱陶しいぐらいにこいつが話しかけてくるから、それに引きずられてつい、いつの間にかという風で。

俺も、細かいことを考えるのは止めた。

こいつはリンと違う奴だとか、でも似てるとか、もうどうでもいい。

今はひたすらサポートオブジェクトに辿りつき、そして帰ろう。今日のことはまた帰ったら、いつか笑い話にしてやればそれでいいだろう。

——そして、十分ほどは歩いただろうか。

小高い丘の上、街道を見下ろすような形で、ぽつりと建つ”ソレ”はあった。

「——……」

あっさりと見つかってしまったそれに、俺は、思わず唾を呑みこんだ。もつとも、位置も形も分かっているのだから、見つけれないわけがないのだが。

一步、引き寄せられるように前に進む。

「あれが目的地か？」

リンの言葉に応える余裕も、俺にはもう存在しなかった。

一步、また一步と近づいていく。

俺の胸中にあつたのは……ひたすらの恐怖と、そして、ひたすらの希望だった。

——ようやく、帰れる。

という想いと、そしてもう一つ。

——あれが、動かなかつたら、どうする？

相反する二つの想いを抱えながら、一步、また一步と。

もはや永遠だとすらも感じた、長い長い十数歩——。

歩いて……そして。

——俺は、そこに辿りついた。

黒の柱。正八角形の、黒い柱だ。

その表面にはいくつかの青いラインが走り、どこかこの世界と隔

絶したような雰囲気を纏っていた。

黒い柱は俺の胸のあたりで、斜めに向かって美しく両断されたように、綺麗に平らとなっていた。そしてその表面には、何か読めない文字がびっしりと並んでいる。

これが、サポートオブジェクトだ。触れれば、蒼く発光してコンソールが起動し、サポートに連絡を取ることができる。あるいはここで強制的にログアウトすることも可能だ。

しかしそれを前にして――俺の体は、恐怖と不安に縛られて、ぴくりとも動かなかった。

「お前の目的は、それなのか？」

ああ、とも、うん、とも応えられず、また頷くことすらも俺はできなかった。

だけれどリンは構わずに「ふうむ」と頷いて、続けた。

「それは、何の目的で、いつ誰が設置したのかも分からなくなて。なんでも……」

「――黙ってくれ」

震える声で、ようやく言えたその一言に、リンが口をつぐむのが気配で分かった。

……やはり、彼女は本物のリンじゃないんだ。

本当のリンならば知っている。これが何と言うもので、誰が設置し、触れればどうなるのか……分かっているはずなのだから。

わずかな安堵と失望。そして不安と恐怖。

俺の心に入り混じる全てが、混ざり合って、攪拌して、瑠璃色に溶けていく。

――そして。わけがわからない心境のままに……俺が、自分でそうしているのかすらも分からないほど、手を震わせながら。

俺は、サポートオブジェクトに、ゆっくりと手を伸ばし。

そして――触れた。



「……つまり、ここと似た世界に放り込まれ、脱出も出来ず、その拳句の果てに私のソックリさんに会ったと」

ギルドホームの一角。

みんなが集うそこに腰かけて、リンは俺の言葉に「はあ」と頭を抱えた。

実のところ、俺だって半信半疑なんだ。まあまったくもって信じられないというなら仕方がない。

「だが、確かに俺は見たんだよ！　ありゃ妙にリアルでさ……」

「あーなるほど。それで、帰るや否やここにログインして、僕たちにぶちまけたと」

力説する俺に、横合いから口を挟んだのはライだった。しかしこちらにも、どこか呆れた表情だ。

「まあアレです。疲れてたんですよ、きつと」

「ちょ、おまつ！？　やめてその目線！？」

ライの物凄く生温かい目線（＋にっこり笑顔）を照射され、うぐうと俺は呻く。

そして横合いから、なぜか俺にぴたりと張り付いてくる、見慣れた少女。

「……そして、怖い怖い夢から醒めたカナメは、真っすぐに私の部屋に飛び込んできたのでした……」

「ちよっ！？」

いや確かに事実だけでも！　速攻でシノブ姉の家に乗りこんだけどもだ！！

「ほほう……」

「なるほどなるほど……」

ゆらり、と刀のような気配を漂わせたリンと、ふむふむと頷きながらしかし完全ニヤニヤモードのユーリさん。そしてなぜか俺の腕をホールドして離さないシノブ姉。

ちよ、その親友！ お前爆笑してないで助けるこの野郎！

「ふむーん。じゃあ辛かったカナメちゃんを、お姉さんが癒してあげるー！」

唐突に、ユーリさんに真正面から飛びつかれ、思いっきり抱きしめられる。

「ちよっ、ユーリさん！？」

「ほーれほれほれほれー。どうかなーお姉さんの柔肌はー？」

「いや確かに柔らかいですが、ちよっと胸が足りなーあいだだだだっ！？」

腹をぐりぐりつねられて苦しむ俺。ちなみに町中なのでダメージは無論ない。

そして背後でリンさんがヤバイことになってるんで！ お願いちよっタンマ！

……………。

すばーん、とユーリさんごと両断された俺は、やや無然としつつソファーに再度腰掛け、はあと溜め息を吐いた。

どうやらユーリさんの制裁が済んだらしいリンも、コホン、と一つ咳をしてソファーに座りなおした。

「しかしまあ、夢で良かったよ。私もそんな世界に放り込まれたらと思うと、正直ぞっとしない」

「んー、まあな」

確かに夢だった。

サポートオブジェクトに触れたら、あっけなくログアウトできて

……そして目覚めたらベッドの上。

まったくもって、あれだけ怖がっていたのは何だったんだという話だ。ちょっぴり情けない。

まあそれに、何より良かったのは……。

調子に乗るからこいつらには絶対に言わないが、そう、ここに戻ってこれたこと。

リン、シノブ姉、ユーリさん、ライ、ミミさん。

全員を見まわして、俺はそう思う。

——これでいい。これで全てが元通り。

あれが何だったのかよく分からないが、まあ戻ってこれたからよしとしよう。

「本当に良かったよ、夢で」

俺は、そう言って——。

そう、言って——。

そう——。

そう……言いたかった、のに——ッ!!!!

再び目を開けば——

そこにあったのは、何も変わらず、ただ広がり続ける平原と蒼い空。

空に浮かぶ円環と、何も答えることはない、冷たい黒。

「あ、ああ……」

笑っていたはずのリンも、シノブ姉も、ユーリさんも、ライも、ミミさんも。

そこにはいない。誰もいない。

全て、幻だった。

その全ては、都合の良い幻想……いや、妄想でしかなかった。

「あ……あああああ……」

俺の指の先が……黒いオブジェクトに、触れていて。

しかし、なんの応えも、そこには存在しなかった。

「あ、あああ……あああああああああああああ——ッ
……！！！」

慟哭と共に、俺は夢中でオブジェクトを抱きしめた。

感触は冷たい。青い光は存在しない。ただあるのは、何の変化もなく、何の答えもない、黒く聳える立方体。ただそれだけ。

上から下まで手を這わせ、刻まれた溝の全てを指で触れる。掌で触れる。頬に触れる。

しかし、それでも。

それでも……何も、起きない。

行きたい。帰りたい。今すぐに。

今すぐにここから……あの場所へ。みんなのところに。今すぐ！！

「ログ、アウト……」

気がつけば、叫びはいつしか、言葉に変わっていた。

「ログアウト……終わり……脱出……帰る……消える……ここから……！」

思いつく限りの、似た意味の言葉を、何度も何度も繰り返して。

そうだ……応えてくれるはずだ。これはサポートに繋がってる。
なら聞こえるはずだ。繋がるはずだ。

「——そうだろうがあぁッ!!」

気がつけば俺は、拳をオブジェクトに叩きつけていた。

サポートオブジェクトは破壊不可能。どれほど殴っても、欠片の
ひとつも落とすことはない。それでも、殴って、殴って、殴って……
拳の皮が破けるまで。

リンがいて、シノブ姉がいて、ユーリさんがいて、ライがいて、
ミミさんがいて、みんながいて……。その幻想が——俺の心の深い、
深いところに、もう修復できないだろう傷を穿っていた。

叫んで、叫んで、叫んで。

殴って、殴って、殴って。

思いつく限りの罵詈雑言を吐き続けた俺は……しかし。

もう、悟っていた。

もう……分かっていたんだ。

——俺は、もう、二度と。

帰ることは、できない。

(08) 一 死と決断

「……カナメ」

オブジェクトを殴り続ける俺の拳を止めたのは、細い、少女の指だった。

リンだ。声だけですらも分かる存在。

彼女の細い指が、俺の拳を優しく包んでいた。

「カナメ……もう」

見上げれば、彼女の瞳は、どこか少し潤んでいた。

アンタが泣く理由はない——そう言おうとして、俺はようやく気付いた。

コイツの性格。たとえ他人事だろうが、それを他人事と思わないお節介。

彼女は、ここに来てから今までの、俺の行動を見ていたのだ。俺の悲しみと慟哭を読み取って、だから、それがまた彼女を悲しませて……。

「お前に、何が分かる……」

気がつけば、口の中から這い出た言葉は、そんなものだった。

「お前に何が分かるんだよ……赤の他人のお前に……ッ！」

立ち上がり、そしてリンに詰め寄って、襟元を掴み上げた。

「何なんだ……何なんだよアンタは！ 何がカナメだ！ 何がリンだッ！ アンタはただの他人だろうが！！ 知った風な口を利いて……ッ！」

「……………」

「アイツらが待ってる……待ってるのに！ 俺は！ 俺はなあ……！」

ぐっ、と喉が詰まり、手がほどける。そして、俺は地面に突っ伏

した。

分からない。分からない。俺は——何をしてるんだ。
こんなところで、わけがわからなくて、リンに当たって、だけど
何もできなくて。

俺は弱い——何もできず何もわからず、ただ喚いているだけの子
供だ。

しかし——そんな俺の背に、そっと、指が触れた。

「……私には分からない。君の想い、君の辛さ……君が何を抱えて
るのかも。分かってあげられない」

けれど、と……その優しい指が、まるで母が子をあやすように、
俺の髪へと触れて。

「辛い時、苦しい時は、泣けばいい。何も分からない私だが……君
の傍に、いてやることぐらいは——」

俺は……俺は——っ！

そして、その瞬間。

絹を裂くような悲鳴が、俺達を切り裂いた。



「なっ……!?!」

はっと、俺は顔を上げる。

見ればリンも、驚いたように背後を振り返っていた。

「い、今のは……?」

悲鳴だった。それも、ちょっとしたものではない。かなり本気の
……まるで、命の危機に直面したかのような悲鳴。その切羽詰まっ
た叫び声に、一瞬、自分がどういう状況なのかも忘れた。

しかし聞こえてきたのは、悲鳴だけではなかった。

男の声。女の声。慌ただしく走り出す音。もう一度の悲鳴、そして怒号。

俺たちは思わず立ち上がると、リンがちらりと俺を一瞥し、一瞬不安そうな顔をして……しかしすぐにそれを引き締めた。

「こっちだ」

リンは方向を指し示し、走り出す。俺もその後へと続いた。

悲鳴。実のところ、VRMMOにおいてプレイヤーを驚かせるような仕掛けは、そう少なくない。

しかし総じて、VRMMOのプレイヤーたちは豪胆だ。ましてや悲鳴ともなると……一体何が起きているのか。

待て、というリンのサインに従い、俺は足を止めた。そこは小高い崖の上だった。高低差はあるがなだらかで、滑り下りることもできらるだろう。

——と、リンが、崖の下を指差した。それに従って、俺も崖の下へと目線を向ける。

「……モンスター？」

モンスターが、いた。三匹……やや遠目で見えづらいが、見覚えがある。大剣を持った二足歩行のトカゲ。いわゆる典型的なリザードマンだが、身につける鎧はどこか豪華だ。

「ジェネラルリザード……？」

Cクラス、割と強敵に位置するモンスターだ。そしてその三匹のモンスターは、どうやら、近くで転倒している馬車を襲っているようだった。

よくは見えない。遠目な上に崖の下は森であり、その木々が邪魔になっているのだ。

（何だ？ イベントか？）

しかしその割には、どこかおかしい。襲われる側のプレイヤーたちが……どう見ても、完全に恐慌している。怖いとか恐ろしいとか

言った風ではなく、恐慌と狂乱。

我先にと走りだし、前の人間を突き飛ばして、足をもつれさせ、それでもまだ前へ前へ。半ば人間の本能でしかない走り方に、俺は若干混乱した。なぜあそこまで恐れる？

「くっ、なぜこんなところに、あんなモンスターが……！」
「リン？」

見れば隣では、腹立たしげに彼女が唇を噛んでいた。

確かにジェネラルリザードは、普通こんなところに出現しない。基本的には、ダンジョンに生息するはずのモンスターだからだ。しかしそれがイベントであるなら、その条件は適応されないはずだ。

リンはちらりと俺を見ると、やや逡巡して、しかし即断した。

「彼らに加勢する！ いいか、君は絶対にここから出るな。たとえば何があってもだ！」

「お、おいっ？」

言うや否や、リンは崖を滑り降りていった。滑り下りてもモンスターからはやや距離があるから、サブライズアタック奇襲攻撃にはならないだろうが……。

「何があっても、って……」

どういう意味なんだろう？

たとえばここで俺やリンがやられても、それは町でリスポーンするだけのことだ。確かにいくらかの経験値や金、アイテムは失うかもしれないが、言ってしまうえばそれだけに過ぎない。

そんなことを考えている俺の耳に、また誰かの叫び声が聞こえ、改めてそちらを見やった。

プレイヤーが、モンスターを迎撃している……ように見える。そしてその周囲では、モンスターからどうにか逃れたらしい人々が、不安げにそれを見つめていた。

だが、詳しい状況までは、さすがにこの距離では判然としない。

「……そうだ」

不意に思い付き、インベントリーを出現させた。そこから、初期アイテムの望遠鏡を取り出し、具現化させる。これを使えばよく見えるはずだ。

戦っているプレイヤーたちに、望遠鏡の照準を合わせる。

「ん？ あれは……」

前線で戦っている、緑色の髪の女性。どうも見覚えがある。

そう、あれは確か昨日。表通りで座りこんでいた俺を心配して、声をかけてくれたプレイヤーだ。どうやら彼女は、馬車を護衛する類のクエストを受けているらしい。

なおのこと、リンのことが心配だった。勝手に戦闘に介入するのは、横殴りと呼ばれるマナー違反であり、面倒になるのではないかと――。

……と。

不意に、ジェネラルリザードの振るった大剣が、緑髪の女性プレイヤーの剣をはじいた。大きく上体が開く。

それは致命的な隙。クリティカルヒットをもらわざるを得ない状況。「待てっ！」という、リンの鋭い声。

そして、次いで振るわれたジェネラルリザードの大剣が、女性プレイヤーの片腕を断ち切った。

「……え？」

飛んでいく腕。噴き出す大量の血。そして激痛にもだえ、傷口を抱える女性。

動きを止めざるを得なかった女性の頭を、ジェネラルリザードは大口を開けて、ガブリと噛みついて……そして、そのまま引きちぎった。

「きゃああああああ！！！」

悲鳴。それは誰のものなのか。だがそんなことなど、もはや気に

ならなかった。

首を失った女性の死体が、がくり、と膝をつく。ぷしゅう、と鮮血が宙に舞い……その五体に大剣を突き立て、捕食を続けるトカゲ男^{リザード}。それにもう一匹が加わって、まるで貪られるように喰らい尽くされていく。

ぐちゃり、べちゃり、ずちゃり、という生々しい音と共に……ようやく、俺の思考は正気に戻った。

（なんだあれは？ ……なに？）

ジェネラルリザードの大剣が、女性プレイヤーを殺し、そして喰っている。眼前の光景はそれそのものであった。だは……しかし、そんなことはありえない、はずだ。

モンスターは人を捕食しない。部位欠損に痛みは発生しない。そしてこのゲームにおいて、ああまで大量の流血はありえず、無論死体が貪られることもありえない。

死んだプレイヤーは、蒼い光の粒となって消えるだけなのだ。それだけのはずなのだ。しかし……でも、眼前の、あのプレイヤーは……。

（消え……ない）

消えていない。消えることはない。リザードマンたちは飽きるまで死体を喰らい、貪り、その肉を呑みこんで血を啜っている。

ありえない。ありえない。ありえないが……しかしそれは圧倒的なリアルで、俺にひとつの真実を訴えかけていた。

即ち。

あの女性プレイヤーは死んで。

そして、二度と生き返ることはないという真実を。

（なんなんだこれは……なんなんだ！）

この日、俺がこの世界に来て最大の、そして最悪の混乱を味わっていた。

胃の中身が喉元までせりあがりかけ、それを必死にこらえた。そして眼前で繰り広げられる凄惨な光景から、俺は目が離せない。

「うおおおおお!!」

捕食を続ける二匹のリザードマンに、横合いから、雄叫びを上げて女性の影が打ちかかった。リンだ。

その凄惨な光景にひるんだ風もない。あるいは怯んでいるのかもしれないが、しかし自分を鼓舞して剣を振るい、突撃していく。

そして二匹のリザードマンがその突撃に反応し、大剣を掲げた。

俺はその光景を、信じられない思いで見つめていた。

Cランクの雑魚モンスター。ただただだけなら、リンが苦戦するはずなどありえない。それはよく知っていた。

しかし、死体を貪り続けるリザードマンたちは……どんなランクの、どんなユニークモンスターよりもおぞましく、そして恐ろしい存在に見えた。

二対一。次々と襲いかかる連撃に、リンは両の手に持った剣で凌ぎ続けるが……だが押しこまれていく。それも、今なお一匹のリザードマンに虐殺され続ける、群衆とは反対方向へ。

「いやあああああ!!」

再びの悲鳴に振り向けば、死体を無視して逃げた群衆へと向かった一匹のジェネラルリザードが、また一人、今度は男を大剣ですりつぶしていた。

そして恐らく、彼が護衛の最後の一人であり……呆然と立ちつくす他の人間は、防具らしい防具も見当たらない。

——そして、そこから先は、もはや虐殺でしかありえなかった。

恐怖によって塗りつぶされた集団は、一人、また一人と、ろくな抵抗もできずにジェネラルリザードの餌食になっていく。

鳴り響くのは怒号、号泣、悲鳴、狂乱、そして人肉の音。

どうやら捕食よりも殺戮を優先しているらしいその思考ルーチンは、逃げ惑う男女たちを一人ずつ、大剣で首を飛ばし、足を飛ばし、そして心臓を切り裂いた。

それを、上から見下ろしながら……俺は戦慄とともに確信した。

——それは、死だ。

本物の死。キャラクターのヒットポイントがゼロになり、町へとリスポーンするそれではない。斬り、喰らい、殺し尽くす。それは本物の死。

ふと、俺の脳裏に、ある言葉がよぎった。

——ゲームの中で死ねば、現実でも死ぬ……そんな話——
フィクション

それはかつて、俺が馬鹿らしいと否定したそのものだ。

しかし現実には、目の前のこれは何だ？ 俺はあの状態になっても、果たして生きてるのか？ 何事もなかったかのように街にリスポーンして……。

(いや……)

ありえない。……ありえない。……ありえない!!

あれは死だ。あれはどうしようもない理不尽だ。ヒットポイントがどうか、そんなものはオマケでしかない。ヒットポイントがゼロになれば死ぬのではなく、死ねばヒットポイントがゼロになる。

凄惨な死の現実を前にして、数値がどうのなどという言葉は、戯言以上の何物でもなかった。

あれは……あれは死だ。他の連中と同じように、あの太剣に潰されれば、俺は……。

(俺は……死ぬ!?)

冷たい戦慄が背筋を駆け抜けけると同時、聞こえてきたのは、女性の叫び声だった。

「姉さん!？」

それはリンのものではない。無論、俺の言った言葉でもなかった。望遠鏡で声の方向を見れば、二人の女性が見えた。二人とも、手と足に枷をはめられている。あれではとてもではないが逃げられない。

腰を抜かしているのだろう、尻もちをついて動けない、長い銀髪の少女。そしてその眼前に、同じく銀髪の、しかしこちらは髪型をショートカットにした女性が背を向けて立っていた。

姉さん、と言った彼女の声が聞こえた。つまり、あの二人は姉妹であり……。

「……大丈夫。シルファは、私が守る」

「駄目……駄目、フォリア姉さん！」

シルファ、と呼ばれた長い髪の少女は、這うようにして姉を目指す。だがフォリアと呼ばれた姉のほうは、ただ優しく微笑むだけだった。

そして、前へ。枷はどうしたのかと望遠鏡を巡らせれば、混乱の中で壊れたのだろう、両足の枷を繋ぐ鎖がちぎれていた。

そして彼女が何をするつもりなのか、俺は気づいた。

「捨て身かよ……！」

彼女の手には、誰かの死体から取ったのだろう一振りの杖があった。

恐らく、彼女は魔法を使うつもりだ。それも遠距離からではなく、至近距離から。

零距离魔法、と呼ばれるものがある。

本来、魔法と呼ばれるものは、《メイジ》系列のクラスでなければ使用できない。

だが零距离魔法に関してだけはそうではないのだ。これは杖という武器の持つ本来の性能によるものであり、プレイヤーのステータ

スやスキルには依存しない。

しかしその名の通り、零距离魔法は威力こそあるが、その射程は極めて短い。そして速射性もない。よって彼女の戦法は、恐らく玉砕。

(どうする……!?)

彼女が生き残れないことは明白だった。

零距离魔法は射程が短いうえ、明らかに発動時間が長いのだ。構える間に剣で叩き斬られて終わりだ。そしてたとえ命中させることが出来たとしても、恐らく相撃ちのような形で、彼女もまた死ぬ。

そして、シルファと呼ばれた妹は、眼前で、姉と呼び慕った人間を失う。そしてフォリアと呼ばれた姉は、妹を守ろうと戦い、永遠に彼女と触れあえないどこかへ消えるのだ。

(俺は……俺はっ!!)

家族。仲間。友人。

俺はもう失った。きっと二度と帰らない。俺はそれを、もう悟ってしまった。

悟ってしまったからこそ、だから分かる。それがどれほどの痛みなのか。どれほどの辛さなのか。未だに俺が、心の底ではそれを認められていないように。

彼女の姉が死ねば、きっともう帰らない。ゲームの中のように生き返らず、リスポーンせず……そこに間違いなくあるはずの魂は、跡形もなく消滅する。

だが俺には関係ない。あいつらが死のうが死ぬまいが、俺には関係ない。

「関係ない……」

第一、あのモンスターは実際に人を殺してる。もしかしたら俺だって死ぬかもしれない。それも、あんな原型の分からないような死に様で、血と肉の一欠片だって残さず喰い散らかされて。

そんな死に方は、俺はごめんだ。

「関係……」

そう。関係ない。彼らが悲しもうが苦しもうが、俺には関係ない。だから……見捨ててしまえば、それで――。

――辛い時、苦しい時は、泣けばいい。何も分らない私だが……君の傍に、いてやることぐらいは――

「……関係……」

でも。何の関係だってないのに、彼女は俺を慰めてくれた。

彼女を拒み続けていた俺に、手を差し伸べてくれた。関係ないはずなの、赤の他人なのに。

ああ分かつてる。分かり切ってる。それがアイツなんだ。

天性のお人よしで、馬鹿で、一途で……。

そしてそんなアイツが、真っ先に飛び込んで、今も誰かを助けたと戦っている。誰かよ救われてくれと吼えている。

こんな絶望的な状況だって、あいつはこれっぽっちも諦めちゃいないだろう。そうに決まってる。

だというのに――。

「俺が……関係ないわけ、ないだろうが……っ!!」

そして、気がつけば。

俺は全力で、崖を滑り降りていた。

(08) 一 死と決断(後書き)

次話、ようやくと主人公がバトルします！ 一話完結がなぜ二話に……！

今日中にもう一話掲載予定です。ストックがなくなってきたのでちよっと頑張ろうと思います。まる。

※11／15 モンスターのランクをB↓Cに変更しました。

(09) 一 残酷な大地

崖を滑り降り、着地するような間もなく、一気に加速。

木々の間を走り抜け、先ほど見た二人の場所へ。

風のように駆け抜け、景色は背後へと流れ去り、そして見えてきた光景。……だが、まだ遠いその場所では、既にフォリアと呼ばれた少女がモンスターのすぐ近くまで迫っていた。

「させ……るかッ!!」

俺は叫ぶ。足に力を込め、さらに加速。

疾走はもはや跳躍へと変わり、俺は風の如く疾駆した。

しかし、少女は止まらない。

一步、また一步とモンスターへと近づく。

フシユウ、と何も言わず語らず、ただ立ち止まったままのリザードマンは、眼前にいる少女のことなどなぜか露ほどの興味もなさそうだった。

しかし、それが邪魔であるのならば、容赦なく殺すだろう。

そして少女は、リザードマンを目の前にして、きつく両目を閉じて杖を掲げ――。

「待てええええーっ!!」

乱入すべく、叫び、手を伸ばした俺に……果たして声は届いたのか。

少女は、はっと何かに気付いたように、俺の方へと振り返った。

(間に合ええーッ!!)

迸る気迫と共に、俺は片手を伸ばす。

そしてもう片方の剣を抜き、少女の前へ躍り出るべく足に力を込め……。

——しかし、何の意味もなく。

ジェネラルリザードの大剣は、掲げた杖ごと、少女の体を両断した。

「いやあああああああっ!!」

その一部始終を見ていた、少女の悲痛な叫びも……しかし奇蹟は起こさなかった。

杖は破壊され、魔法は不発。

ジェネラルリザードには、まったく何のダメージも与えられなかった。

ふしゆるるるう、という鳴き声と共に、肉塊となった少女の骸をぐちゃりと踏み越えて……そして、それと同時に。

「貴様ああああ——ッ!!!!」

俺の中で何かが弾けて、絶叫と同時に、片手のスチールソードが跳ねあがった。

恐怖？ 不安？ どうでもいい……どうでもいいッ!!

逆袈裟の形で跳ねあがったスチールソードを、しかしジェネラルリザードは、まったく焦る様子もなく大剣で防いだ。

ジェネラルリザードの大剣は、石を研いで作りだしたものだ。不格好で大重量だが、しかし強度は折り紙付きである。

キンッ、と火花が散って刃が弾き返されるそれを、しかし俺は当然のごとく予想していた。

弾かれると同時に刃を滑らせ、円回転を生むことで硬直を消す。そして次に放たれたジェネラルリザードの横薙ぎを、バックステップで回避した。

「よくも……よくも俺の目の前で……！」

少女の悲痛な叫び声は、俺に抗えぬ現実の痛みを思い起こさせていた。

大切な人を奪われる憎しみ。悲しみ。辛さ。もう大切な人に会えなくなると言う痛み。そして、何かに全てを奪われるというただ理不尽。

……俺の目の前で、こいつはそれをやったのだ。

ただひたすらに、それが許せなかった。

少女の慟哭。少女の絶望。少女の悲しみ。それが俺の中の、いろんなものと重なって、ただ理不尽への憎悪が膨れ上がっていく。そしてその憎悪の炎を糧にして、カチリ、と俺は刃を構えた。

俺の動作に反応するように、ガアッ、という小さな叫び声と共にジェネラルリザードが俺へと飛びかかってくる。

俺のクラス、『平民』は、スキルも補正も存在しない。

言ってしまうえば、最弱のクラスだ。

だがしかしその一方。《オーリオウル・オンライン》のプレイヤーの一人であった俺が、ただの『平民』でありえないことなど明らかだった。

確かにステータス補正はない。スキルなどもない。あるといえ、なぜか残ったままのステータス。しかしもう一つ……あるものを俺は持っていた。

およそ二年もの間、この《オーリオウル・オンライン》にプレイし続けた膨大な経験。何のクラスにもスキルにも属さない、フォルトゥーナ大陸を渡り歩き続けた俺自身の経験プレイヤースキルと技術……！

振り下ろされる、パターン通りの大剣振りおろし。しかし俺は、完全に見切っていたその一撃を、コンマ一ミリほどの差で回避。そしてカウンター気味に跳ねあがった刃でモンスターの肩を薙いだ。リザードマンは痛みと怨嗟を叫びながら、しかし飽くなき殺戮へ

の欲求で、さらに首を伸ばして噛みつきを繰り返してくる。

しかし、これすらも読み通り。俺は、一足でジェネラルリザードの懐に潜り込み、そして奴の弱点である喉元に、天を突くようにして真上に刃を突き刺した。

「グアアアアアアアアア!!」

完全なクリティカルヒット。

刃が喉元を貫通し、リザードマンは断末魔のごとき叫びを上げた。しかし、俺はまだ終わらせるつもりはなかった。膨れ上がる怒気を糧にして、貫通した剣に両手で力を込める。首を貫通したまま真横に走った銀閃が、ジェネラルリザードの首を割断した。

そして、振り抜くと同時。首を半ば以上も斬り割かれたジェネラルリザードは、断末魔もなく、がくりと膝をつき……そして、無数の青い光の粒となって虚空へと消えていった。



彼の戦闘を見て、私は両目を見開いていた。

ジェネラルリザード。はっきり言うが、名前を聞いたことはあっても、剣を合わせるのは初めてだった。ここシス王国では、北側の辺境でしか見られないという強力な魔物。

だというのに彼は、まるで何の苦勞もない様子で、その強敵を一蹴した。

(なんなんだ……彼は?)

ごく普通の平民。協会の登録証も持たず、戦闘経験もないだろうはずの一般市民。

だというのに、そこらの魔物などまるで寄せ付けず、そしてこのジェネラルリザードさえも一刀のもとに屠ってしまった。

まったく意味がわからない。

ジェネラルリザードのランクは、協会の書類によればCランク。協会登録外、すなわち何のクラスも持たないはずの人間がそれを殺

傷することなど、私は聞いたことがない。

だが同時に、私は彼が剣を振るう姿から、まるで目が離せなかった。

（私は……彼を死なせたくないと思った）

だから、護衛を申し出た。

（私は……彼を泣かせたくないと思った）

だから、私は彼を慰めたいと思ったのだ。

しかしそれがなぜなのかは、自分でもまるで分からない。

初めて出会った気がしないから。……言葉にしてしまえばきっとそういうことなのだ。陳腐だけれど、他に表現も名前も見つからない。

そして今。

鮮やかな剣技で、強力なモンスターを屠る彼の姿に……私は見惚れていた。

そして、見惚れるあまり、自分の状況すらも忘れていた。

ごう、という風斬り音に、ようやくと我に返る。

「――っ！」

二匹にうちの一匹、その強烈な横薙ぎが、既に目の前にあった。

しまった、と毒づくよりも早く、両手に握った剣を交叉させて一撃を受け止める。しかし、

（重い……っ！！）

一瞬の油断は、モンスターに力を溜める時間を与えてしまったようだ。

今までの数倍は重い一撃に、顔をしかめ、しかし全力で拮抗し……。

そして押し切られ、私の体は後ろへと吹き飛んだ。

「が——はッ!!」

壁に背中から激突し、口の中の空気が漏れる。

(この痛み……まずい……)

これは、数秒は起きあがれない。

自らのダメージを冷静に分析し、そして四肢に力が入らない状態のまま、音を聞いた。べたべたという足音と、金属が擦れる音。そして、至近距離で聞こえるモンスターの荒い息。

(ダメか……!)

恐らく、ジェネラルリザードは、既に大剣を振り上げている。

それを振り下ろされれば、私は死ぬ。決して生き残れまい。この姿勢では、後はただ殺されるしかない。

(私は……死ぬのか)

それも仕方のないことなのかもしれない、と、密かに思った。

私が今、彼に見惚れた数瞬。

私は、守ろうとして何もできず、目の前で死んでいった命のことすらも忘れていたのだから。

(彼に軽蔑されるのも、当然か)

……きつと、それも仕方のないことだった。

それは、振り下ろされる間際の数瞬間。

死を前にして、私は、ただ目を閉じた。

……だが。

その衝撃は、いつまで経ってもやってこない。

気がつかないうちに天国にいつてしまったのか、とも思ったが、しかしどうやら違うらしい。土の感触も、忌々しい血の匂いも、まるで何も変わっていないから。

おずおずと目を開けてみれば……そこには、誰かの靴が見えた。目線を上げる。

そこには、剣を構えながらリザードたちを牽制し、そして私へと手を差し伸ばす、少年の影。

「……カナメ？」

馬鹿な、と思った。

それこそ幻覚だ。あの距離から、このタイミングで駆けつけられるはずがない。

第一、私はきつと彼に嫌われている。どこかで私は彼を傷つけ、彼は私を怨んでいるのだろうと……今までの流れで、なんとなく気づいていた。

その事実が、関係が、ずっと密やかな鈍痛となって、胸の奥にちくりと刺さっていた。

けれど関係ないと割りきれず、気づけばその背を追って、彼の想いの一欠片、彼の流す涙の一滴でも理解したいと、私は思った。

理由なんてない。きつと理由なんてないが……それでも私は、たとえ嫌われているとしても、彼の前から潔く去ることが出来なかった。

そしてそんな私の態度に、彼は呆れ、時に怒り、そして時に私を責めた。

——今日が終われば、私はもう二度と、貴方につきまったりはしない。

だから、せめて今は……今日だけはと。彼が黒い柱の前で慟哭の声を上げたとき、私はそう願って、決意した。

誰かの代わりでもいい。私が彼の糧に、ほんの少しでもなれるのならと。

だからここで、彼が私を助けたりなんてしない。
それこそ、都合のいい夢だろうと。

——だけれど。

「立てるか、リン？」

その声は優しく、そしてはっきりと。

そして伸ばされた手は……幻覚ではないと証明するように、私の手を、ぎゅっと握った。

痛みも決意も、まるで溶けて消えてなくなっていくような、そんな温度で。

手を引き上げられて、どうにか立ちあがる。

私は二度、三度と頭を振って、落としていた剣を拾い上げた。そしてもう一度正面を見れば、そこには幻覚などではない、確かに彼が立っていた。

私に背を向け、剣先でリザードたちを牽制している。

その背に……私の中の様々な感情が、ごちゃごちゃに混ざりあって、攪拌されて、わけがわからなくてどうしようもなくて、ただ瞼の奥から涙が溢れそうで。

「……カナメ」

私の声に、彼はただかぶりを振った。

そして、かちりと刃を下段に構え直す。

「感謝は後だ。今はこいつらを片付けよう」

そして、ほんの少しだけこちらを振り向いて――

「片方は頼んだぞ。リン」

その言葉は、一体私の胸の中に、心に、どういった変化をもたらしたのか……それは分からない。

だけれど、湧き上がってくる想いの波と共に、にやりと笑って、私もまた剣を構えた。

「任せろ！！」

かくして、私たちは戦闘を開始した。



ぱちり、と火が爆ぜる。

その炎は、暗闇の中を赤々と燃えあがり、ほの暗い宵の闇をオレンジ色に染めていた。

ジェネラルリザードを片付け終えた俺たちは、森の中に散乱していた死体を、出来る限りかき集めて、こうして火葬していた。

バラバラになった死体を集めるのは苦戦はしたが、火葬自体は、リンの持っていた火打石で比較的楽に終わった。

もっとも、そんな道具でもなければ、火葬するなどと彼女も言いださなかっただろうが。

その炎を、俺は温度が分かるほどの近くに座って……ただ見つめていた。

彼らの肉体が、魂が、炎に焼かれ煙となって、空へ昇って行くのを。

かさりと、草をかき分ける音が聞こえた。リンだろう、と、振り向かずとも分かった。むしろこの場にいないのは彼女だけだから。

「……終わったのか」

「……ああ」

振り向かずに尋ねた俺の声に、リンは頷いて応えた。

彼女はずっと、死体を片付け終わったあとも、その遺品を集めていたのだ。

死体は残り、それゆえまた遺品も残る。デスペナルティによるドロップではない。その人が生きた証となって、死体と共に残される。

結局のところ。生き残っていた人間は、ほとんど誰も存在しなかった。

ただ一人の少女を残して、誰も。

……リンの足音が、そのただ一人、火を挟んだ反対側で未だ蹲っている、銀髪の少女へと向かっていった。

少女もまた俺と同じく、ただひたすら炎を見つめていた。

失ったことを信じられず、受け入れられず、涙を流すこともできず、ただ見つめていたのだろう。その気持ちは、ひたすらに分かった。俺もそうだったから……いや。……きっと今も、そうだから。

「……あつたよ。これで間違いない？」

リンが差しだしたのは、小さな髪飾りだった。

それは……彼女の姉のものなのだろう。

白い鶴を模した小さなもので、髪飾りとしてはひどく質素だ。血で少しだけ赤く汚れている。

しかし妹である彼女曰く、姉の私物などまるでなかったらしく、ただそれだけが彼女の身に着けていた私物なのだという。モンスタ―の襲撃と共にどこかへと失われたそれを、リンがひたすら歩きまわって探していたのだ。

「あ……」

リンに差しだされた髪飾りを、少女は、小さく目を見開いて、じっと見つめた。

そして、震える手をそっと差しだして……リンはその掌に、血に濡れた髪飾りをそっと置いた。

「あ……あ、あああ……」

彼女は、その髪飾りを両手でぎゅっと、優しく握りしめた。

口元に……その首飾りを、そっと当てて。

「っ……ねえ……さん——、う、ああああ——……!!」

別離の涙と、慟哭と、悲しみと。

押し寄せるそれに抗おうとして、しかし抗えず、少女は体を折った。

「あ、ああ、っ……うあああああ——……っ!!」

そして慟哭は、やがて嗚咽へと変わる。

リンにそっと抱き寄せられながら、涙を流し続ける少女の姿を、俺は直視することが出来ず……ただ、ぼんやりと空を見上げた。

あの時、躊躇わなければ。

俺が躊躇わなければ、彼女の姉を救えたのだろうか？

ただその想いが、俺の胸にずっと鈍い痛みを残して。

そしてその嗚咽は、やがて彼女が寝静まるまで、ずっと止むことはなかった。

(09) 一 残酷な大地(後書き)

遅くなってごめんなさい。推敲にかなり時間がかかりました……。あれですね、寝不足で書きちゃ駄目だよっぱり！ うん！

(10) 一 彼方からの声

夕闇の中で、目を開いた。

宿屋で目を覚ますのは、ここに来て二回目だった。ごく当然の如く、昨日と何も変わっていない光景。

二十四時間制限など、まるで最初からなかったかの如く……俺を目を覚ました。

なぜか、妙に暖かい感触に包まれて。

「……えっ？」

思わず素っ頓狂な声を上げたのは、起きたらもう夕方だったから、というような理由ではない。

いや確かに、若干の由々しき事態ではあるかもしれない。何せ、昨日からおよそ半日以上は眠っていたというわけであるのだから。寝すぎて体が少し重い気がするが、そんなものなど既にどこかへ吹っ飛んでしまっていた。

いや、それはともかく、今は置いておいて。

そうではなくて……俺が驚いた理由は、要するに、俺のベッドの中になぜか銀髪の少女がいたからだ。

「う、んん……」

少女が身を捻る。それに反応してビクウ、と身を跳ねさせながら、状況を整理すべく記憶を巡らせた。

銀髪ロングの、それも割と美少女。

この場合問うべき命題はひとつだけだ。

それがなぜ、自分と一緒にベッドで眠っているのか？

——そう。

それは確か、あの夜……。



「……彼女は、もう眠ったのか？」

嗚咽の止んだ、暗闇と静寂の中。

不意に発した俺の問いに、「ああ」と背後でリンが答え、その横に腰を下ろした。

……Cランクモンスター、《ジェネラルリザード》三匹により、ある商隊が襲われた事件。

それに偶然遭遇した俺とリンは、彼らを救うべく加勢したが……しかし救うことが出来たのは、たった一人の少女だけだった。

そして、目の前で燃え盛る紅。それは死者たちを弔う、炎であった。

炎は赤々と燃えあがり、空に灰を運んで行く。死者の血と肉を、そして無念をも焼き尽くして。

「……人は、死ぬんだな」

ぽつりと漏れた俺の言葉は、俺の本音としては当然でも、リンとしては意外だったのだろう。

驚いたように目を見開いて俺を見ると……しかし不意に、目線をそらした。

「人死に見るのは、初めてなのか？」

リンの問いに、俺は応えることは出来なかった。

空を見上げる。そこには変わらず存在する、白く濁る円環《オーリオウル》。

あの円環が証明するように、ここが本当に《オーリオウル・オンライン》の中ならば……人が死ぬ光景など山ほど見てきた。

そして、何も思わなかった。それは本当の死ではなかったから。

無数の青い光の粒と共に虚空に消え、そして十秒後には、自分の町へ戻る。

それがこの世界、《オーリオウル・オンライン》での死であった。そのはずだった。

だけれど――

（……この世界では、人が死ぬ）

それはきつと、どうしようもない事実であった。

俺は、掌の中のナイフで、自分の指を切ってみた。

わずかなダメージ。視界の左端にヒットポイントのバーが浮かび、一ドットほどが削れるのが見えた。それはヒットポイントの総量からみれば、ほんのわずかなものでしかない。そして自動治療オートリジエネレートによって、やがてヒットポイントは回復し、傷も消える。

……だが、それに何の意味がある？

たとえば腕を落としてヒットポイントの七割を減らし、その後回復させたとして……恐らく傷はふさがっても、腕までは帰ってこない。

そして回復不可能な傷を負ったとき、きつと、このヒットポイントはゼロになるのだ。

現実と同じだ。傷はふさがヒットポイントがふくするるかもしれない。しかし、失ったものまでは戻らない。

それはもはやゲームではなかった。圧倒的なリアル。圧倒的な喪失。圧倒的な、死。

「人は……死ぬ……」

それはごく当たり前のことで、そして、ごく自然なことなのだろう。

しかしこれほどまでにおぞましいものなのだと、十七年の人生の中で、俺は初めて知った。

それゆえに護衛のない外出は禁止されていて、それゆえにリンは

俺を護衛すると言いだして、それゆえに、あの時、リンは俺に出る
なと言ったのだ。

（これは、本当に……ゲームなのか？）

ちくり、と、ナイフでつけた傷が痛んだ。

VRMMOに本物の痛みは存在しない。そんなものがあっては、
もはや娯楽などではないのだから。

しかし、ここには、確かにある。

痛み。喪失。恐怖。生と死。それは即ち、ゲームという枠を越え
たリアル。

それを、果たしてなんと呼ぶのか。

（――現実、だ）

そう。ここは現実なのだ。

馬鹿馬鹿しい話だと思う。

ここは《オーリオウル・オンライン》の中なのだ。ならばゲーム
の中なのだ。そのはずなのだ。

だがしかし……これが現実なら、全て納得がいく。

町の様子を思い出す。今ならば分かる。《オーリオウル・オンラ
イン》にいるプレイヤーは皆、戦士や鍛冶師、最低でも商人だ。一
般市民として生活するプレイヤーなど一人もない。

しかし、違った。きつとあの街に住む人間の大半は、恐らく、普
通に働いて普通に死んでいく、ごく普通の人生を送る人々なのだろ
う。

ログアウト

サポート

逃避はできない。都合のいいやつも存在しない。

人が泣き、笑い、暮らし……そして時に時に死ぬ。

同じだ。まったく同じだ。ここは、現実とまったく同じ。

「完成された……世界」

それはもはやゲームなどではない。

……もう一つの、現実なのだ。

深く、深く息を吐いた。俺は空を、星空を、ただ見上げて……。そして気がつけば、眼前で燃え盛っていた炎はいつしか消えていた。

リンがスコップで灰を拾い集め、いくつかの袋に分けていく。……恐らく遺骨だろう。

そしてそのうちのひとつ、小さな袋に詰められたそれを俺に渡してきた。

「それを、あの少女に渡してやってくれ」

「……お姉さんの分か？」

「その中に入っているかは分からないがな……納得はしてくれるだろう」

それなら、お前が渡した方がいいんじゃないか、という俺にリンは首を横に振った。

「彼女、見ただろう？ あの枷……奴隷だよ」

「奴隷？」

「他の町から売られてきたんだ。……一応、私も騎士のはしくれだからな。奴隷を連れて町に入るわけにはいかない」

その言い方に若干むっとする俺に、小さく彼女は苦笑して手を振った。

「勘違いするな。彼女がどうこうの話じゃない。彼女を連れて町に戻れば……逃亡奴隷を捕縛してきた、とでも思われそうだからな。それではあまりに不憫だ」

そうか、と俺はそこでようやく頷いて……格納すべくインベントリを開いたが、しかしやめた。これは、きっと俺のインベントリに入れるべきじゃない。

「奴隷……ね」

振り返り、少女が眠っているだろうテントを見やる。

もちろん、その意味は分かっている。しかし本物の奴隷を見たのは、現実どころか、この《オーリオウル・オンライン》の中でも初めてだった。

「……彼女は、どうすればいい？」

「出来れば、私が引き取りたいが……」

リンはしばし言葉を濁し、ふと俺の方をみた。

「……まあ、君が引き取るのが一番か」

「自由にさせるわけにはいかないのか？」

俺の純粹な疑問に、しかしリンは「いや」と首を横に振った。

「彼女の首元に、魔法でつけられた奴隷の印がある。それがあ限り、自由に歩いていれば逃亡奴隷扱いだ。殺されても犯されても、誰も文句は言えない。そしてその印は……誰にも消すことは出来ない」

「……………」

実に胸糞の悪い話だった。

奴隷は何かの理由で売られるか、あるいは自分から望んで奴隷になるらしい。

そして奴隷になれば……その生涯において、別の人生はありえない。

体に刻まれた印が、奴隷を一生縛り続けるのだ。

「だから、君が主人マスターになればいい」

「どうということだ？」

「商隊は全滅した。恐らく奴隷商人だろうな。なら今、彼女はここにも買われていない状況なわけだ」

言われて、なるほどと俺は頷いた。彼女を俺が買ったことにしておけば、少なくともすぐ殺されることはない。

そういうことかと承諾すると、同じようにリンも頷き、肩をすく

めた。

「それに……まあ、奴隷ひとつでそんな顔をする君だ。彼女を悪いようには扱わないだろう」

そう言っ、リンは少し微笑んで……俺はなぜか恥ずかしくなっ、顔を背けてしまった。

……こいつはリンじゃない。

かつて自分が唱え続けていたその言葉は、今はどこかへと霧散していた。

確かにこいつは、あの通りのリンじゃないんだろう。

だけれど、こいつの中身はきつと、真っすぐで一途で、馬鹿正直で。俺が信賴して背中を預けた……あのリンと同じなのだ。

だからこいつのことも、少しは信じてみようと思っていた。

こいつは、あの通りのリンではないけれど……それでも、リンはリンなのだから。



そして、俺は銀髪の少女を背に担ぎ、宿に辿りつくと同時に熟睡してしまい――。

かくして、この状況なわけだ。

宿についた時には既に早朝だったわけで、むしろ宿屋の人が受け入れてくれたことの方が奇蹟的なだろう。しかし――。

(どうすつか、こりゃ)

穏やかな寢息を立てながら眠る少女に、はあ、と溜め息を吐きながら、思う。

起こすべきかな、と迷いいつも手を伸ばし、ふと……寝返りを打つと同時に、小さく聞こえた言葉に、俺はその動きを止めた。

「――ねえさん……」

「……………」

それは――

もし俺があの時、迷わずにすぐに飛び出していたのなら、救えていたかもしれない命。

彼女に、失わずに済んだかもしれない、大切な命。

俺は、小さく唇を噛んだ。しかし俺がどれほど後悔しても、時は巻き戻らない。俺は二度と彼女の姉を救うことはできず、失われた命は、二度と帰ることはありえない。

これはゲームなどではなく、現実なのだから。

「……すまない」

謝ってすむものではないと、分かっている。

「俺が……俺が、もっと強かったら……」

逃げず、逃避せず。

俺がもっと、現実に向きあえていたなら。

そうしたら、彼女の姉は、死なずに済んだのだろうか？

この世界で人が死ねば、本当に死ぬ。

きっと彼女の姉は蘇らない。

あの日、俺に声をかけてくれた女性プレイヤーも、もう蘇らない。

俺は、逃げ出したかった。

この世界から逃げて、もう一度、あいつらに会いたかった。

そしてその俺の弱さが……彼女の姉を、殺したのだろうか？

分からない……分からない……。

（分からない――）



私が目を覚ましたとき、もう、太陽は地平線へと沈みかけていた。夕闇が、この宿屋の一室をも照らしているその中で……私は目を覚ました。

いや……正確に言えば。

起きようとして、起きられなかった、と言えいいだろうか。

私のすぐそばには、男の人がいたから。

生まれてこの方、男の人になんて触ったことがない私は、思わずびっくりして、とりあえず寝たフリをしてしまった。

多分、きつと、気づかれてないはず。

そう思いながら、私は、ただひたすらに目を閉じる。

……悲しい、夢を見たと思う。

いいや、夢じゃない。姉をかばおうとして、姉さんは死んだ。

昨日からずっと繰り返して、その夢ばかりを見ていた。

トカゲ男の振り下ろした、巨大な剣が……姉さんの体を叩き潰す、あの瞬間。

あんな光景は、忘れたくっても忘れられるはずがない。痛くて、痛くて、痛くて苦しくて、私はずっと、ただ何もできず泣き叫んでばかりいた。

——けれど。

私は、死ななかった。

青色の髪の男の人が……私を助けてくれたから。

嬉しかったのか、と聞かれれば、違う、とも思う。

私は姉さんが好きだったから。姉さんがいなくなったこの世界で、どう生きればいいのか分からない。

今日の昼。

たまたま目覚めた私のもとにやってきた黒髪の女の人、私を助

けてくれた、その男の人に買ってもらいなさい、と言った。

男の人はぐっすり眠っていたから知らないだろうが……正直、それも嬉しいとは思わなかった。

幸運なことだっというのは分かっている。

奴隷商人は死んで、一人になった私を、この人たちは助けようとしてくれているのだ。

それは分かっていた。分かっていた、けれど――。

(……姉さんは、死んだ……)

死んだ。死んだのだ。姉さんは、あの人は、もうこの世のどこにもいない。

私たち二人はいつでもどこでも一緒だった。

何もできない私を、いつも姉さんは助けてくれていた。親に、借金のカタに売られたときも、泣きわめく私を姉さんはいつも慰めてくれた。

――もう、駄目ねえ。シルファは、私がいないと、本当に駄目なんだから。

ああそうだ。その通りだ。姉さんがいなかったら、私は何もできない。

だからあの時、姉さんの代わりに、私が死ぬべきだった。

それが駄目なら……せめて一緒に死ねばよかったんだ。

だから、私は、素直に嬉しがることも、感謝することもできなくて。

ふと、もぞり、とベッドの上で男の人が動いた気配がした。何かされるのかもしれないと、思わず身を固くする。そして……

「……すまない」

絞り出すように、彼はそう言った。

（――え？）

不意にわけがわからなくて……私はその時、きつと呼吸さえ止めていた。

「俺が……俺が、もつと強かったら……」

――もつと強かったら。君の姉さんも、助けてあげられたかもしれないのに。

（ああ……）

そうか、と、不意に全身から力が抜けていく。

冷静に考えれば。あれは仕方のないことだったのだ。

他の誰かにそう言われた時、私はそれを認められないだろう。けれど、でも客観的に見れば、確かにあれは仕方のないことだったのだ。

たとい誰だって、姉さんは助けられなかった。

なのに……なのに、それでもこの人は……。

（こんな強い人でも……苦しんでる）

そんな意外な気持ちと、そして、この人はなんて優しく、なんて悲しそうなんだろうと、そう思った。

なら、私は何なのだろうか？

弱くて、どうしようもなく……そんなことに悩んで。姉さんが死んだぐらいで、私も死んだほうが良かった、なんて。

私を必死に助けて、それでもまだ必死に苦しんで、悲しんでくれている人がいるというのに。

私は……なんて贅沢なんだろうか？

溢れそうな涙をこらえて、私は目を閉じ続けた。

ここで目を開いてしまえば……きつと、彼に失礼だろうから。

そして、不意に。ずっとずっと向こう、どこか遠い、遙か彼方で。

——生きて、と。

そう告げる姉の声が、確かに聞こえた気が、した。

それから三十分後。

ようやく落ち着いた私は、息を吐きながら目を開いた。

(10) 一 彼方からの声 (後書き)

次回、第一章完結です。

しかし推敲に時間がかかってしまい、ストックを作る余裕がなく…。

申し訳ないのですが、第二章掲載にはちょっと時間を頂きたいと思っています。

というか本当は一章分だけで完結させるつもりだったんですが、欲が出てしまい、まだまだまだまだ続きそうです (笑)

(11) ー 生きる

「どこへ行くんですか？」

夜。街を歩きながら背後から問われた声に、俺は振り返った。

振り返れば、そこには例の銀髪の少女――シルファが、疑問を浮かべたままの顔で俺を見つめていた。

「ちょっと、郊外にな。安心してくれ、モンスターは出ない」

「はあ……」

シルファ、と名乗ったこの少女は、案外、俺を怖がることはなかった。

奴隷というだけあって手ひどい扱いを受けてきたんだろう。それを予想していた俺は、もちろん最初、自分のことも警戒されるだろうと思っていた。

しかし案外そうでもなく――今のところ、彼女は俺に対し、ごくごく普通に振る舞っていた。

あるいは、彼女の姉のことを責め立てられるかもしれないと覚悟していた俺は、半ば拍子抜けしつつ、彼女を宿屋の外へと連れ出した。

それは昨日、帰る直前に「夜になったら郊外の丘に来てほしい」とリンから言われていたからだだった。

郊外の丘というのは、つまり、例の花畑の丘のことである。

安全圏内というわけではないが、モンスターはポップせず、特別何かトラップやイベントがあるわけでもない。それなら、彼女も連れていこうと決めたのだ。

夜とはいえ、あそこの美しさは昼夜を問わない。きっと、いいリフレッシュになるだろうと。

もっとも、リンの用事の方は何なのか、まるで聞いていないのだから……。

「でも、夜に外出って、ちょっとドキドキしますね」

二人歩く道すがら、くすりと笑いながら、彼女はそんなことを言った。

「そうか？」

「はい。父も母も、夜は出歩かせてくれませんでしたし……奴隷時代は、そもそも外に出られませんでしたから」

特に何か気負う様子もなく告げた言葉の重さに、俺はやや顔をしかめつつ「そうか」と答えた。

父がいて、母がいて、それでも奴隷商人に売り飛ばされたのだ。親に売られた子供……帰る道すがらに聞いたリンの推測が真実なら、これほど壮絶な人生はそうはないだろう。

俺のそんな態度に、彼女は気分を害した様子もなく、むしろくすりと笑って肩をすくめた。

そしてそこから先は沈黙で……二人、夜空の下を歩いていく。相変わらずNPCの姿はないが、夜ではあっても未だ人の姿はまばらに存在していた。夜型プレイヤーなんてのもまだいるんだろうか、などと思いながら、道を歩く。

俺は、この世界が完成された世界だと、そう結論づけた。

すなわち果てしなく『現実』に近い、異世界のようなものではないのかと。

その想いを以て今周囲を見回してみれば、確かになるほど、これほどにしっくり来る言葉はなかった。

屋台を売る人間、道を歩く人間、酔い潰れる人間、消費者と生産者、与える人間と受ける人間。

見る限り、彼らはまさしくそれを行っている。そしてそれを行う自分に、一切疑問など持っている様子もない。

——完成された世界。もうひとつの現実。異世界……。

「なあ、シルファ」

「はい？」

「君は奴隷って言ってたけど……そのクラスは、変えられないのか？」

少女はわずかに驚いたように目を見張って……そして無言のまま、その細い指先がぐるりと動いた。同時に、無音で出現する青いウィンドウ。

「……これを、見てください」

俺はわずかにその光景に驚きつつも、促されるまま覗きこみ、飛び込んできた光景に戦慄した。

彼女のクラスは、奴隷——そしてその項目欄が、まるで封印されるように、錆色の鎖で絡め取られていたのだ。

「これは……」

「奴隷は一生、このままなんだと……私は言われました。決してその鎖が解けることはない……」

言って彼女が、手を横に避ける仕草をすると同時に、クラスのウィンドウは掻き消えた

俺は、ろくろく慰める言葉も言えないまま、「……すまない」とだけ言くと、彼女は「いえ」と小さく首を振った。

——奴隷は、一度奴隷となれば、別の人生などありえない。

昨日の話を思い出し、わずかな衝撃と気持ちの悪さが、俺の喉元を駆け抜ける。

そして同時に、発覚した真実。つまりシステムが生きているということ。

もっとも俺は、リンが何度もインベントリを開いていたところを見ていた。しかし、出来る限りのゲーム的要素は排されていたと思う。

恐らく彼女たちは、クラスやインベントリ、ステータスといった

システム用語、さらに言えば『町中であればクラスを変更できる』というシステムも理解しており……そしてこれも恐らくだが、彼女たちはそれを当然のものとして享受している。

ジェネラルリザードのアルゴリズムがそのままだったように、俺の知識や経験も、この世界で幾らかは役に立ちそうではあった。

この『世界』が何なのかは、正直、まるで分からない。

本当に現実なのか。本当に異世界なのか。あるいは、やはりゲームの中なのか？

しかし……脱出できないということ。人々はここで暮らし、ここで生きて、ここで死ぬということ。そして……俺もまた、同じように……。



「ようやく来たな」

リンの声を聞くと同時、俺たちは、その花畑へ足を踏み入れた。そこは俺が最初に目覚めた場所。そして……あの日俺達にとっての、最後の思い出の場所。

俺はその光景を直視することができず、リンへと視線を向けた。

彼女は両腰に手をあてて、少し苦笑してみせる。

「遅いぞ。もう始まるところだ」

「始まる？ 何が……」

いいから、と言う彼女に連れられ、俺たちは崖の方向へと向かう。

雄大な景色。花畑の向こうに見える山々。しかし、そこにあるのは寂寞だけで――。

「……だから、何があるんだよ？」

胸を衝く想いに、思わず語勢を荒げながら問うと、彼女は口元に指を当てて……そして、空に指を向けた。

——パンツ。

「……え？」

最初は、何が起きたのか、俺には分からなかった。
けれど——。

バラララッ……という音と共に、空に光の花が広がって……。

「うわぁ……！」

隣のシルファが、どこか感動したような声を出すと同時——それが何であるのか、ようやく俺は理解した。

「花火……？」

パンツ、ともうひとつ打ちあがり、空に鮮やかな光の花を咲かせる。

俺の言葉に、リンが「ああ」と頷いて、その横に並んだ。

「どうだ？ 凄いだろう。ここは半年に一度、花火を上げるんだよ」
それがたまたま今日だったから……という彼女の言葉に、しかし俺は、何も答えることが出来なかった。

空に打ちあがる花火。

いつしか集まっていた人々が、それに向けて拍手と歓声を捧げる。

「た~~~~まや~~~~！！！」

あの日と同じ声。同じ雰囲気。同じ……空気。

同じように、空に花火が打ちあがって……俺は、それを見つめて
いて……。

——気がつけば。

俺の口は、俺の声は、知らず言葉を紡いでいた。

「シノブ姉……ユーリさん……」

——……私は、カナメのおかげだと思ってる。

——あらあ。それはつまり、私じゃ不満ってことお？

思い出せる声。思い出せる言葉。思い出せる日々。あの日の記憶。けれど……お前たちは、ここにいないくて……。

「ライ……ミミさん……」

——正直、僕も……あの《ギガス》を倒せたのは、僕はカナメさんのおかげだと思ってます。

——ああー、憧れのS級ユニーク……一体どんな武器が出来るんでしょう？

俺を慰めてくれた声。はしゃいでいた声。ふざけあった日々。友として、仲間として。

けれどもう……けれど、もう……。

「リ、ン……」

——その……なんだ。お前はああいうが、今回は本当に感謝してる。

リン。お前は俺のことを忘れてしまったんだろうか。

俺を覚えていたお前は、どこかへ消えてしまったんだろうか？

今はもう……手の届かないどこかへ。

——その……ずっと決めてたんだ。S級のユニークを倒したら……って。

俺を信じ、俺の手を引いて、俺の目の前で笑ってくれたお前は——。

俺を、知ってくれていたお前は、もう、どこにもいないんだろうか？

それとも……今も隣にいるリンは、本当にお前なのだろうか？

——私は、ずっと……君のことが——

……その言葉の続きを。

俺が聞くことは——永遠に、ない。

つう、と頬に一筋の涙が溢れて。

空に浮かぶ花火が、ぼやけた光の筋となって、虚空に消えていく。

俺は足掻いた。俺は逃げようと思った。俺は、この世界の人間じゃないと、そう思った。

けれど、眼前の光景は確かに存在して……でもそこに、あいつらはいなくて……ただそれが……今はひたすらに悲しくて。

「……カナメさん」

そっと、俺の頬に触れたのは、シルファの指だった。

俺の涙をぬぐって……そしてまるで聖母のように、優しく口を開く。

「悲しい時は……泣いていいんですよ……」

それはいつか——リンに言われた、慰めの言葉。

そしてその優しさが……ストン、と俺の胸の底に落ちた。

「あ、ああああ……」

それはかつての慟哭ではない。
ただ認められず、逃げようとして、駄々をこねていたあの時とは、
違う。

「あ、あああ……うああ——っ……」
母に抱きしめられるように……その胸の中で。

「う……あああああああああ——っ……！」
俺はこの日、この世界に来て初めて。
本当の涙を——流した。

(……ごめん……リン……シノブ姉……ユーリさん……ライ……ミ
ミさん……)

少女の胸の中で、嗚咽を漏らしながら——静かに。

(俺は……もう、帰れない)
俺は、静かに、認めた。

帰る方法が見つからない。代替方法など当然思いつかない。そしてこの世界が一つの現実であるなら、現実から逃げだす手段は……きつとないだろう。

分かっていた。理解していた。

けれど頭で理解しているのと、心の深くから理解するのは、まるで違っていて。

だから分かっているにしても、ずっと認められなかった。

だけれど今、果てのない悲しみが、俺の胸の中を満たしていく。
俺はただひたすらに、みつともないほど嗚咽を漏らし、涙を流しながら。

——ただ想うのだ。

俺を助けようとしてくれた人がいた。

俺を慰めようとしてくれた人がいた。

俺を救おうとしてくれた人がいた。

俺の手で守れず、失った命があった。

俺が守れなかったから、大切なものを失った人がいた。

そしてこうして——俺を包んでくれている人が、いる。

だから俺は、きっと、もう。

この世界に……この人たちに、背を向けることは、出来ない。
ありもしないものとして、切り捨てることなど……出来ない。

（俺は——）

ああ……もう会えない、忘れられぬ友たちよ。

決して切ることでできない、かけがえのない……絆たちよ。

（俺は、この世界で——……生きる……）

もうお前たちには会えないかもしれないけれど。

でもお前たちですら、俺の中から消えるのは、もっと嫌だから。
だから——。

（俺は、生きる……）

この世界で。

この……悠久のフォルトウーナで。

白く濁る円環と、空に打ちあがる花火は、ただ、涙を流す俺を見下ろして。

——どこか、俺を、祝福しているような気がした。

(11) 一 生きる (後書き)

第一章、完結しました。いや第一章というよりも、長い長いプロローグが、と言うべきでしょうか。

心理描写に重きを置いたつもりでしたが、どうだったでしょうか？

何か感じるものがありましたら、ぜひ評価頂ければ幸いです。

というわけで、必要かどうかわかりませんが、次章予告。

P・S・活動報告にてシリアス崩壊系パロディ『座談会』ネタ、はじめました。

|||||

「俺は……君になら、殺されてもいい——」

この世界で生きることを決断したカナメ。

しかし彼の前に現れたのは、もはや二度と会えぬと思っていたはずの、ある人物であった。

突きつけられる刃。交わらぬ心。

そして蠢き出す暗雲は、彼らに思いもよらぬ現実を突きつける。

——次回、第二章『別離の氷刃』

血に濡れた願いは、少女の心に奇蹟を起こすのか——。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3702y/>

悠久のフォルトーナ

2011年11月17日11時56分発行